

## V 考察 一古墳時代後期の北武藏と新屋敷東遺跡一

- |                 |                    |
|-----------------|--------------------|
| はじめに            | 2) 埼玉への窯業製品の供給システム |
| 1) 北武藏の集落の動態    | 3) 土師器生産と6・7世紀の武藏  |
| 2) 窯業生産の展開と北武藏  | 3、古代の開発と石製模造品      |
| 1) 東国の窯業生産の前提条件 | まとめ                |

### はじめに

新屋敷東遺跡は、古墳時代後期の典型的な東国の集落遺跡である。カマドをもつ堅穴式住居跡が、一定の範囲に集中的に構築されている景観と、窯業製品の大部分を土師器で賄う東国形態は、掘立柱建物跡と須恵器で構成される西国形態とはきわめて対照的である。

この東国形態の集落が、6・7世紀という日本の古代国家の成立への準備段階に、どのような役割を果たしたか、新屋敷東遺跡及び周辺の諸集落の動態を検討することから導いてみたい。ここでは得てして古墳や寺院・郡衙、あるいは畿内地方からの搬入土器などから、上部構造の交通の現象形態（石母田 1971）から評価されがちな西高東低的な中央集権的関係はひとまず置いて、在地の手工業生産の展開、とくに窯業生産の展開と流通の過程のなかに新たな展開を見出そうとするものである。

とくに北武藏は、武藏国造をめぐる内紛に見られる在地秩序の変転、新興首長層の台頭の著しい地域であり、集落の動態もよりドラマティックに進行したと思われる。

そこで本稿では、二つの視点から北武藏の中の新屋敷東遺跡を見つめ直していく。その一つは、窯業生産の展開であり、一つは集落の動態である。

なおここでは、便宜的に本稿で集落の展開を裏付けた土師器の変化を軸に、この変化に他の集落の土師器を対応させることによって、北武藏における古墳時代後期の集落の大まかな動態をつかむこととする。ここでは食膳具が土師器の中心となる段階以降、北島型暗文土器の出現までのおよそ200年間を対象とした。個々の器形の細かな型式変化は、本文中で述べているので、古墳時代後期土器の諸特徴と、変化の方向性と画期について触れ、その画期をもって集落編成の動態を明らかにしていく。

### 1 北武藏の集落の動態

まず本文中で検討した新屋敷東遺跡の発達段階に則り、他の北武藏の集落遺跡の発達段階との併行関係を発掘調査の成果を基に示しておく（註1）。ただし、各集落の分析方法は、互いに異なり、型式として考えるスパンも異なるため、ここで示す併行関係は、あくまでも大まかな指標に過ぎない。そのため、強引に新屋敷東遺跡の発達段階に併行させ、一部は各報告段階で設定した段階を越え該当させた。

ここで検討した集落は、全て旧荒川以北の古墳時代後期の37集落跡である。この資料の選択は、

①新屋敷東遺跡と地理的にも隣接し、耕作や水利など生産活動を互いの集落が、共有する可能性の大きい資料であること。②竪穴式住居跡が30軒以上調査されていること。③6・7世紀にいわゆる比企型壺を主体として供給を受けていない集落であること（一部を除く）。④境は、北を利根川、西を神流川とした。しかし上毛野・下毛野・下総の各集落とは、不可分の関係が考えられる。

この分析の目的は、新屋敷東遺跡が、北武藏の古墳時代後期の他の集落の動態にいかに関わり、展開したかを探ることにある。作業前提37遺跡として児玉・大里・埼玉の令制下の大郡におおむね匹敵する3グループに分割して考えることとする（註2）。

37遺跡の古墳時代から古代にかけての集落に何軒の竪穴式住居が構築されたか、その推移を2160軒について検討すると、第603・604図のような構築数の増減観が確認された。しかも隣接する集落間は、構築数のピークが異なることに気付いた。この現象は、各集落の維持する耕地の潜在的生産能力と農業水準に関わり、集落内の人口増加や耕地の拡大によって変移したためと考えられる。ただし地力の低下が、隣接する非可耕地へ、集落ごと丸抱え的移動の前提的条件ではない。集落の再編成には、様々な在地の要因と外的要因、さらに自然の営為力が起因している。

集落跡の調査は、調査された範囲内（調査区）という限定付きだが、普遍的な遺構である竪穴式住居の構築数が最高になる段階は、次の5つを設定できる。またその特徴を示す北武藏の集落遺跡は、以下の通りである。

第247表 北武藏の集落のピーク

	児 玉	大 里	埼 玉
第1のピーク (和泉・Ⅰ期)	若宮台・真鏡寺裏・後張・ミカド・夏目・下田・山根・吉川端	六反田	中三谷
第2のピーク (Ⅱ期・Ⅲ期)	台・後張・南大通り線内・姫姫神社前	上敷免・新屋敷東	
第3のピーク (Ⅳ期)	川越田・夏目・社具路・山根・東谷	砂田前・道ヶ谷戸	小針
第4のピーク (Ⅴ期・Ⅵ期)	台・高野谷戸・天神林・中道・宇佐久保・真鏡寺裏・吉川端・村後・秋山東	新屋敷東・三ヶ尻天王	
第5のピーク (8世紀前葉)	若宮台・天神林・社具路・雷電下	六反田・内出・白山・東川端・樋ノ上・天神・北島	水深

このうち新屋敷東遺跡を始め、台・若宮台・真鏡寺裏・六反田遺跡等の各集落は、2回のピークを迎える。調査区内の所見ではあるが、集落の占地が古墳時代後期中に回帰的な現象が認められる。集落の占地（註3）は、耕地への水利（用排水の確保）を基礎に、公私共利の地を巡り、隣接する他の集落と活発な開発行為がされたことが予想される。この現象は、以下にまとめられる。

A集落が増加にある段階には、近隣のB集落は衰退する。一方新たにA集落の内部からC集落が周辺部に出現し、衰退期のB集落の構成員を巻き込み成長するサイクルを、集落の再生産と仮定する。ただし各集落遺跡の発掘調査の事例から、安易にその動態を読み取ることはできない。たとえ隣接するA・Bの集落のピークが、AからBへと続くとしても実際に理論通りに移動したかは疑問である。

そこで一案として、各集落間の動態を探るために距離によるネットワークを考えることとした

(註4)。A・Bの集落間の距離が、4km以内の場合――、10kmまでを――とし、10kmを越える場合は結ばない。また増加段階の集落を●で表わし、出現期・衰退期の集落を●で表わすこととした。さらに両者の関係を――で表わすこととする。なお○は、該期の竪穴式住居跡が確認されなかった遺跡である。

これを各段階ごとに作図すると、第605・606図のように変化していくことが分かった。以下略述する。

[和泉期] 和泉期の集落が、それ以前の集落とどのような関係にあるか、本稿では深く立ち入らない。しかし和泉期の集落が大規模に展開した児玉と埼玉に挟まれた大里では、現在のところ明確な集落の資料は提示されていない。児玉型のネットワークを大里に想定することは困難である。大里には、5世紀代の大形古墳も築かれておらず、児玉型の在地首長層は存在しなかったと考えられる。

児玉型のネットワークとは、女堀川や小山川が形成した氾濫原と自然堤防を耕地として開発する後張・六反田・夏目・山根遺跡等の集落遺跡が、近接した場所に展開する実態に反映されている。とくに出土土器の検討から後張遺跡は、五領期から継続して展開していたことが明らかである。和泉期に後張遺跡を軸として、空閑地である台地上や氾濫原等の公私共利の地へ進出したといえよう。また台地奥部へ進出した遺跡（真鏡寺裏遺跡等）が、その後急速に収束しミカド遺跡等に吸収されていく。

[第Ⅰ期] 第Ⅰ期に入っても、児玉の優位性は変わらない。しかも各集落の規模は、それぞれ肥大化する。また衛星的に存在していた新生集落が大型化し、さらに周辺に小集落を生む。前段階のネットワークは、より緊密に拡大する。これらの集落は、女堀川や小山川に沿い、水利を共有していたことは注目に値する（鈴木 1984）。後張遺跡を軸に六反田・山根・古川端・下田・川越田遺跡等の各集落が拡大していく。丘陵よりに出現したミカド・厩薙神社前遺跡等の集落も規模を拡大している。

どこの竪穴式住居跡にもカマドが付設され、新たな煮沸形態が急速に普及したことが分かる（中村 1984）。カマドをめぐる調理と食事の体系的変化は、古代を貫徹する文化事象となる。

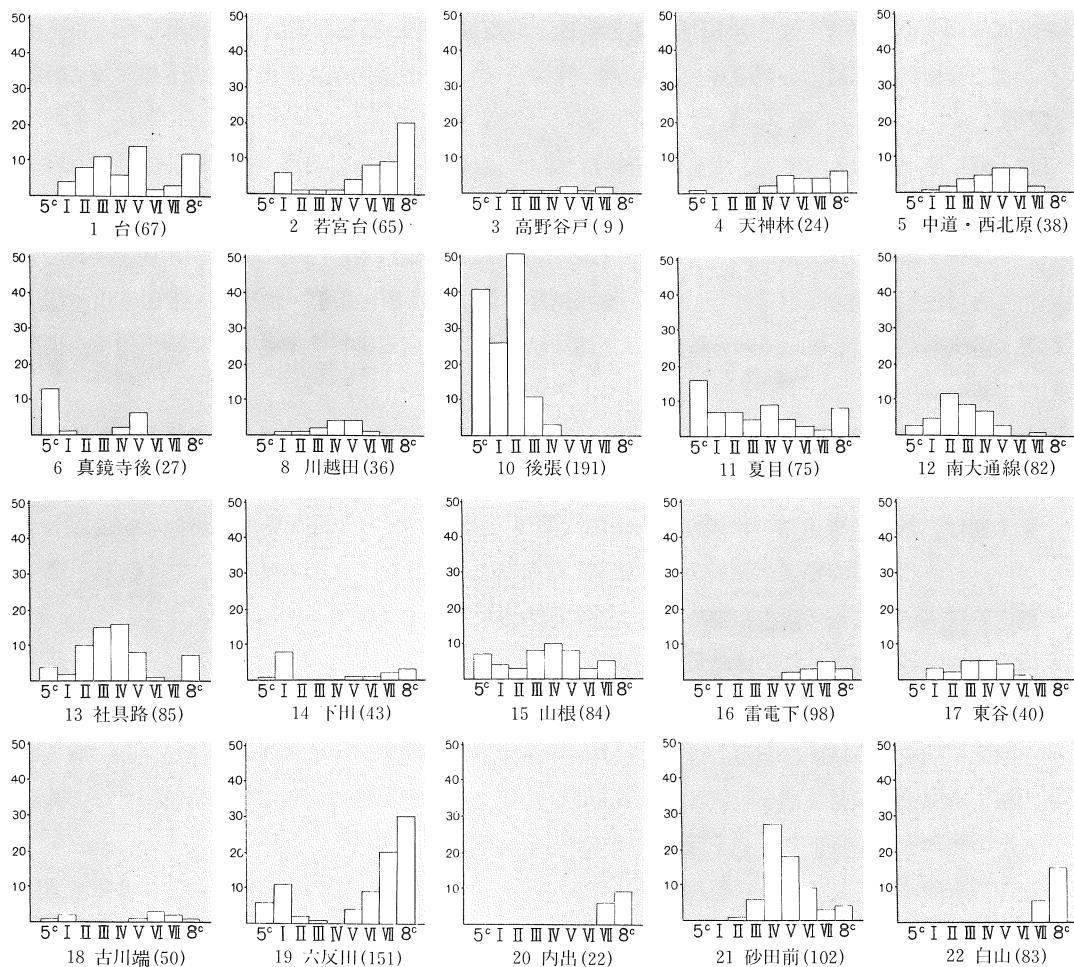
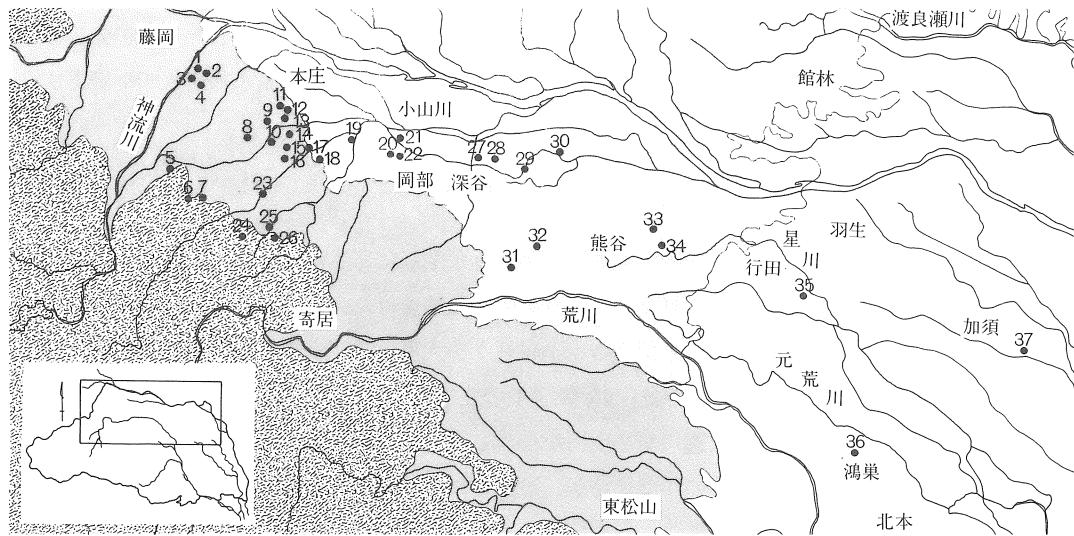
第Ⅰ期は、新屋敷東遺跡の出現期でもある（註5）。大里では、明確な集落跡が他に報告されていない。しかし大里の集落が児玉から、衛星的な集落として出現したのではない。この点は、妻沼低地内の集落跡の調査・報告が進めば、次第に明らかにされてこよう。

埼玉の中三谷遺跡は、この段階最も規模を拡大する。

[第Ⅱ期] 児玉のネットワークが変形してくる。女堀川を挟んだネットワークは解体し、本庄台地側の集落に集中する傾向にある。後張・社具路・南大通り線内遺跡等の集落は、衰退傾向にある東谷山根・六反田等の各集落を吸収し急成長を遂げる。上毛野との境に近い中道・台遺跡では、神流川左岸の集落と、ネットワークを保ち続けながら成長する。

新屋敷東遺跡は、この段階に急速な成長を遂げる。大里では唯一の集落の例である。砂田前遺跡の萌芽が見られる。児玉と大里を結ぶ位置に登場する。

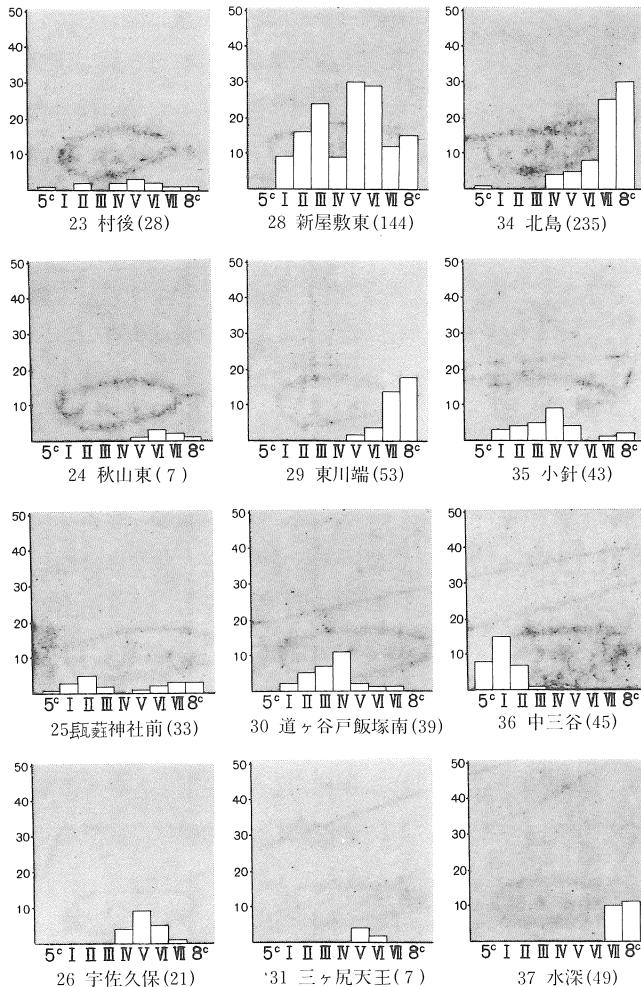
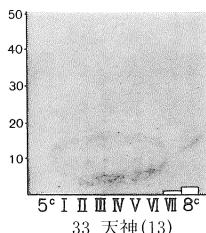
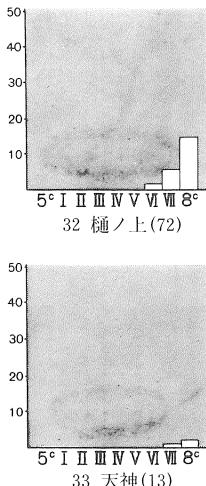
中三谷遺跡は、衰退の方向に向かっている。埼玉では、稻荷山古墳の造墓を始めとする埼玉古墳群が形成され、北武藏に新秩序が出現した。最近の調査で明らかになりつつある行田市若小玉古墳



第 603 図 北武藏の集落の動態①

- |           |               |
|-----------|---------------|
| 1 台遺跡     | 20 内出遺跡       |
| 2 若宮台遺跡   | 21 砂田前遺跡      |
| 3 高野谷戸遺跡  | 22 白山遺跡       |
| 4 天神林遺跡   | 23 村後遺跡       |
| 5 中道遺跡    | 24 秋山東遺跡      |
| 6 真鏡寺遺跡   | 25 須佐神社遺跡     |
| 7 ミカド遺跡   | 26 宇佐久保遺跡     |
| 8 川越田遺跡   | 27 上敷免遺跡      |
| 9 濱訪遺跡    | 28 新屋敷東遺跡     |
| 10 後張遺跡   | 29 東川端遺跡      |
| 11 夏目遺跡   | 30 道ヶ谷戸・飯塚南遺跡 |
| 12 南大通線遺跡 | 31 三ヶ尻天王遺跡    |
| 13 杜貝路遺跡  | 32 横の上遺跡      |
| 14 下田遺跡   | 33 天神遺跡       |
| 15 山根遺跡   | 34 北島遺跡       |
| 16 雷電下遺跡  | 35 小針遺跡       |
| 17 東谷遺跡   | 36 中三谷遺跡      |
| 18 古川端遺跡  | 37 水深遺跡       |
| 19 六反田遺跡  |               |

番号は地図と一致し、括弧内は検討した住居跡数



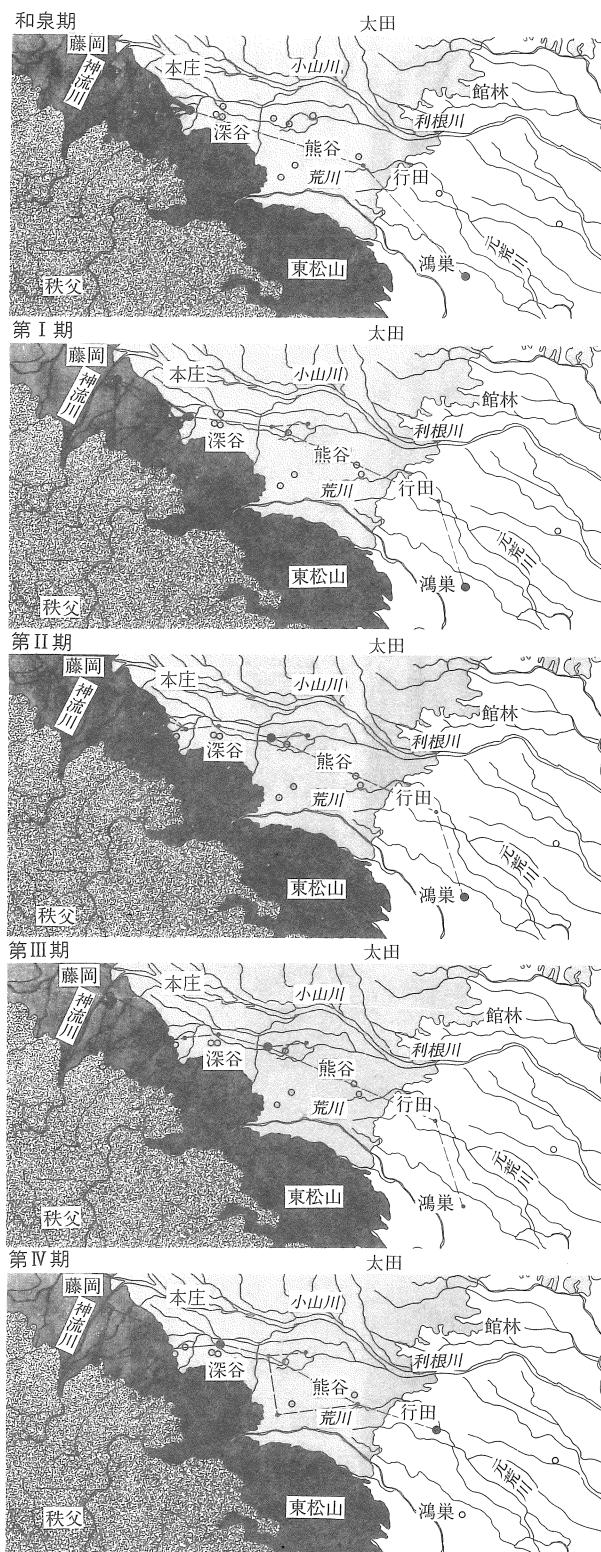
第 604 図 北武藏の集落の動態②

群内の北大竹遺跡のように、和泉期から比企型壙の初現段階まで続く集落が、古墳群の形成（MT15型式併行）とともに忽然と収束している状態は無視できない（中島1991）。また埼玉古墳群に隣接する陣場遺跡でも、比企型壙を主体とした住居跡（栗原・駒宮1990）が確認されているが、古墳群の開始以降に繋る比企型壙の集落は見出しが難しい。

【第Ⅲ期】 児玉では、衰退途上の山根遺跡が再生する一方、隣接する後張遺跡は、極度に低退化する。しかしその他の集落は、第Ⅱ期と変わらない集落編成である。小山川流域の小規模化した集落は衰退し、みられなくなる。

ところが児玉の外縁部に当たる、中道・台遺跡あるいは大里の新屋敷東遺跡などは盛行する。埼玉の中三谷遺跡も急速に衰退し、後張遺跡などと歩調を併せていく。しかし児玉のように周辺に大型集落は確認されておらず、その後の動向は不明瞭である。

第Ⅲ期の集落間のネットワークは、第Ⅱ期のそれを温存しつつ、台地上に展開した新生集落をバネ



第605図 北武藏の集落のネットワーク①

に発達した関係である。埼玉の集落の相対的な低下は、比企の各集落の盛行と関係があるのであろう。その意味で両者の緩衝地帯である大里の新屋敷東遺跡が、この段階に隆盛することは大きな意義を認められる。

とくにこの段階に、割山埴輪窯の操業が開始され、新屋敷東遺跡を控える木の本古墳群や、増田古墳群に供給されていることは、決して無関係ではないであろう。これは、中三谷遺跡の衰退と、相反して成立する生出塚埴輪窯跡群の操業開始と密接に関わっている。生出塚埴輪窯跡群は、埼玉古墳群の大形古墳に供給するために経営された埴輪窯である。埼玉古墳群の形成と深く係わり、その集落の一部も確認されている。大形古墳の專業窯が、それまであった集落の移動と前後して操業を開始したことの意義は大きい。

また埼玉古墳群の近隣に、埼玉古墳群を直接支えたと考えられる小針遺跡が登場したことも見逃すことはできない。埼玉で、さきに表わしたように比企型坏をもつ集落が、急激に衰退し、代わって小針型坏をもつ集落が出現してくる過渡期にこの段階は該当している。

このように急速な集落の変化のみられる埼玉に比べ、児玉の各集落のネットワークの変化の傾斜は、緩やかであると言えよう。

〔第IV期〕 児玉のネットワークは、第IV期に入ると再び、夏目・山根・社具路・南大通り線内遺跡を核として、周囲とくに小山川の上流にむかい、集落

の展開が始まる。村後・宇佐久保遺跡等の出現である。中道遺跡の周囲では、真鏡寺遺跡の再形成が始まる。神流川沿いの台・若宮台・天神林・高野谷戸遺跡の集落の衰退は、急テンポである。

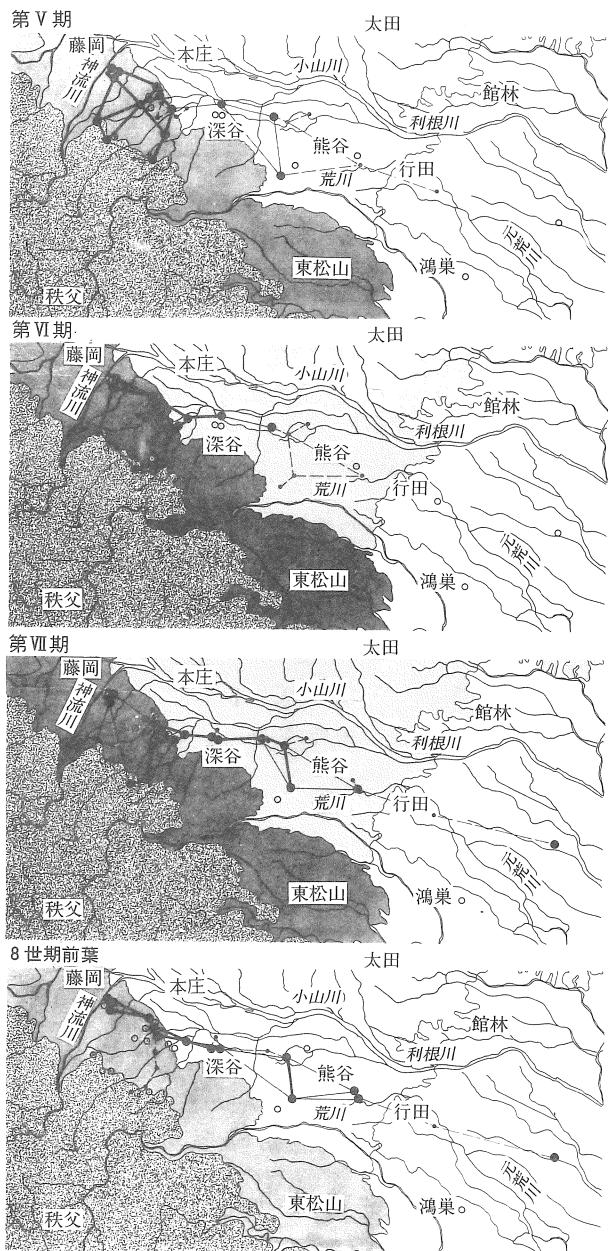
第IV期は、児玉の集落のネットワークが再編成されたのである。第V期には、各流域に捲かれた集落の種が、一斉に開花する。その余調的役割をこの段階は果たしている。集落再編成の動きは、大里にも波及する。急成長を遂げる道谷ヶ戸・砂田前遺跡等と、やや衰退的傾向の新屋敷東遺跡（註6）や北島・三ヶ戸天王遺跡などの新生集落に、児玉と埼玉のパイプ役を考えることができる。

埼玉の小針遺跡の隆盛は、小針型土器の独自の生産と、後述するが、埼玉地域の墳墓の新たな編成秩序に支えられている。埼玉古墳群を軸としたネットワークは、本来、比企型環の集落を支持母体としていたらしい。その支持母体を払拭し、埼玉古墳群の家産的な集落が、独自の型式の食膳具を採用した背景に、武藏における埼玉古墳群の優位性が示されている。

児玉・大里の集落間のネットワークの緊張化・集合化は、比企の埼玉への進出という相対的な危機管理意識の現象形態といえる。

〔第V期〕 第IV期に派生した各集落が相互に成長し、それぞれが緊密なネットワークを取り結ぶ。児玉では、小山川・女堀川の流域に成熟した集落が、さらに周辺地域へは、小集落が展開した。六反田・古川端・下田・山根遺跡などの集落が、再び成長し始める。

大里では、砂田前・新屋敷東・三ヶ戸天王遺跡等の集落が急激に成長した。この原動力は、砂田前遺跡に隣接する樋詰遺跡で確認された大規模な人工灌漑（用水）路の開削に反映されている。こ



第606図 北武藏の集落のネットワーク②

の大溝は、溝底から階段状の足掛けをもち、溝底にまとまった第V期に相当する有段口縁壺が、大量に発見されている。

埼玉では、この段階にかかる大形の集落は確認されていない。

〔第VI期〕 第V期に成立したネットワークが、継承・発展された段階である。川越田・社具路・東谷遺跡等は軒並み下降し、山根・古川端・六反田・甄莊神社前・秋山東遺跡等の集落は、規模を増加させる。集落存続の分かれ目は、経営基盤の確保の有無による。

丘陵地への積極的な進出は、鈴木徳雄氏も指摘する畠作への大きな依存（鈴木 1984）や、養蚕と桑木栽培等の対価価値の高い農村製品の質的向上と生産量の増加が考えられる。河川の集中する六反田遺跡のような集落の再出現は、河川氾濫や耕作人の移転で、荒蕪地化した「原」「野」等の低地の再開発事業である。

大里では、新屋敷東遺跡に代表される集落が、荒川や小山川の自然堤防上に展開していた。一方東川端・飯塚南・北島遺跡・樋の上遺跡等の第VII期に爆発的に発展する集落の萌芽がみられる。大里では、大形前方後円墳の造墓や丘陵を埋める群集墳の形成が緩やかだったため、前方後円墳体制の秩序の崩壊をバネとして、集落が拡散する前提条件は整っていたのである。

埼玉では、この段階の集落の資料は乏しい。しかし第VII期に併行する古墳は、多く確認できる。

〔第VII期〕 第VII期に入ると、各集落の交代は現実化する。大里の各集落や埼玉の水深遺跡で顕著な新興集落の出現には、古墳時代的な集落間の結び付きを越え、集落構成員の移住を伴う律令時代的な集落ネットワークへの胎動が見られる。それは新たな在地内の諸関係の再編成を狙い、行政的な国分割的発展である郡（評）の成立を背景にしていた。

奈良時代には、比企・入間へ半島系の人々を移住（入植）させ、在地内の集落と再編成し、高麗新羅郡の立郡に及んだ。これと同様の措置が、大里・児玉にも存在していたと推定できる。渡来系の人々は別にして、畿内系暗文土器の在地内生産（北島型暗文土器）の開始と流通は、畿内の土器生産者の系譜を引く土器製作者の移住、ないしは伝習を予測させる。生産の中心は、今のところ深谷市上敷免遺跡に求められる。

児玉では、中道・古川端遺跡などが衰退傾向にあり、逆に雷電下遺跡などが増加傾向にある。大里では、砂田前・新屋敷東遺跡が衰退傾向にある集落がある。一方、上敷免遺跡を始めとし、白山・内出・東川端・樋の上・北島遺跡などのように、急速に成長する遺跡がある。ただ新屋敷東遺

第248表 新屋敷東遺跡と各遺跡の併行関係①（右が新屋敷東遺跡）

若宮台遺跡 (大和 1983)	後張遺跡 (立石 1983)	六反田遺跡 (浅野 1981)	中三谷遺跡 (富田 1989)	台遺跡 (中村 1980)	南大通り線内遺跡 (増田 1989)
P	後張IV ↔ P	六反田II ↔ P	中三谷I ↔ P	P	南大通り線内I・II ↔ P
鬼高I ↔ I	後張V ↔ I	七反田III ↔ P・I	中三谷II ↔ P	I	南大通り線内III・IV ↔ I
鬼高II ↔ II	後張VI ↔ II	六反田IV ↔ I・II	中三谷III ↔ I	児玉I ↔ II	南大通り線内V ↔ II
鬼高III ↔ III	後張VI <sub>a</sub> ↔ II	六反田V ↔ II・III	中三谷IV ↔ II・III	児玉II ↔ III	南大通り線内VI・VII ↔ III
鬼高IV <sub>1</sub> ↔ IV・V	後張VII ↔ III	六反田VI ↔ ---	小三谷V ↔ III	児玉III ↔ IV	南大通り線内VIII ↔ IV
鬼高IV <sub>2</sub> ↔ V・VI	後張VII ↔ IV	六反田VII ↔ V・VI	IV	児玉IV ↔ V・VI	南大通り線内IX・X ↔ V
鬼高V ↔ VII	IV	六反田VIII ↔ VII	V	児玉V ↔ VII	南大通り線内XI ↔ VI
真間I ↔ A	VI	六反田IX ↔ A	VI	児玉VI ↔ A	南大通り線内XII ↔ VII

跡は、衰退的傾向ではなく、掘立柱建物跡群（倉庫群）を集落の内部に編成し、構造的質的な転換があったと考えられる。

埼玉では、急速に成長した水深遺跡がある。各地で集落の質的転換が図られたこの段階に、土器生産にかかる集落が、忽然と出現するのは、埼玉の内的諸矛盾を危機バネに急成長したためであろう。埼玉の質的転換は、後述する生出塚埴輪窯跡群の埴輪の供給のシステムの瓦解にほかならない。それは凡関東的な埴輪生産の停止と同時に作用した。この空白を埋める紐帶は、小敷田遺跡出土出木簡のような動産の蓄積を背景としていた。

ところで、北島型暗文土器は、白山遺跡を西限、水深遺跡を東限とする令制下の榛沢・幡羅・大里・男衾・埼玉の各郡の新生集落へ供給された。これらの集落は、一斉に急成長する各集落へ共通に供給され使用されていた。それは暗文土器の存在から荒川・小山川の乱流地帯に、強力な畿内地方からの挺入れが推定される。大里は、未だに児玉や利根川の対岸の上毛野のように、集落が拡散的に一定水準まで分解した地域ではない。未開拓の土地は、一定の排水処理を大規模に展開すれば、営農が可能な原・野等の開ける地域である。古墳時代以来の経営方式から、小敷田遺跡出土木簡にみられる収奪方法を始めとする動産の蓄積による経営方式が、耕地の拡大の前提条件を生んでいた。

〔8世紀前葉〕児玉の各地に積極的に展開していた7世紀からの各集落は、停止的傾向が伺える。本庄台地から櫛引台地へと成長した集落のネットワークが、直線的となる。これは律令制度、とくに垂直的文書伝達の迅速化に伴う交通網の整備、ここでは東山道及びその枝官道といった、交通路に沿い結集する集落、郡衙等の機構を支える近隣集落が成立する。

こうした官衙集落と、それまでの古墳時代以来の在地内の内的編成秩序によって作られてきた集落を弁別することは難しい（田中 1991b）。第VII期の新生集落（能登 1983・1986）が、交通網に沿う集落の原初形態を採るとすれば、郡衙機構の充実と共に8世紀中葉には、成熟していたといえる（山中 1984）。そればかりか北武蔵のこの地域だけではなく、関東地方一般の律令社会への傾斜のなかでとらえられる（註7）。

児玉では台・若宮台・天神林・夏目・社具路・下田・六反田・内出・白山遺跡、大里では東川端・樋の上・天神・北島遺跡、埼玉では水深遺跡等の集落である。

第249表 新屋敷東遺跡と各遺跡の併行関係②

内出遺跡 (飛田野 1986)	白山遺跡 (中村 1989)	6世紀後半↔IV 7世紀前半↔V 7世紀後半↔VI 8世紀初頭↔VII 8世紀中葉↔A
内出I↔VII 内出II↔A	白山I↔VII 白山II↔A	
樋の上遺跡 (小川 1986)	精進場遺跡 (高橋 1978)	小針遺跡 (斎藤 1984)
樋の上I↔VII 樋の上II↔A	6世紀前半↔I 6世紀中葉↔III	10号住居跡↔III 6号住居跡↔III・IV 2号住居跡↔IV

交通に偏った集落の成長は、その交通機能の低下、すなわち文書主義行政の遅滞がおこると、横の交通関係である在地の集落間の連絡が密となる（石母田 1971）。そして再び在地勢力による動産の集中といった再生産が始まる。8世紀前葉の集落は、その転換の可能性を常に秘めていた。

このように北武蔵の各集落間の動態を探ると、児玉・大里・埼玉に一定の地域

的な方向性が読み取られる。比較的安定した開発基盤をもち、台地・丘陵への耕地の拡大をバネに成長した児玉の集落。荒川・小山川の乱流地帯で、排水を中心とした治水事業を大規模に展開し、耕地の拡大を図った大里の集落。比企をバックボーンとする埼玉古墳群の勢力。国造級の在地首長層のもとに、家産経済を支える足立郡北部を含めた埼玉の集落。そして地域的な特徴を払拭する状態、つまりこの三地域を破る集落の出現、それが第VII期の北島型暗文土器を伴う集落なのである。

## 2 窯業生産の展開と北武藏

### (1) 東国の窯業生産の前提条件

次に在地の集落間の諸関係を最も表わす窯業生産について考えておく。ここで窯業生産が、なぜ地方の上部構造の問題にまでも迫りえるかを若干記しておきたい。

古墳時代後期の窯業生産は、須恵器と土師器に二分されることは周知の事実である。この二つは、生産時における製作者の労働形態や生産組織・需要者の違いを含むあらゆる点で異なっている。このことは、須恵器出現以前や施釉陶器登場以後の窯業形態との比較を通じ、より明らかになってくる。

土師器の生産組織にかかわる問題は、これまで文献史学の検討を中心に行なわれてきている。浅香年木氏が、土師器の生産を須恵器と比較し、「土師器の場合には、必ずしも政治権力の介在を不可欠の条件とせず、ほとんどが、自給生産に近い形で確保されている」と結ぶように、土師器生産は集落内で自給生産的形態が中心とされている（浅香 1971）。

土師器の生産は、6・7世紀までに各戸毎の生産から各集落ないしは特定集落による生産にすでに転換していたらしい（田中 1991a）。彼らの生産は、集落あるいは数集落からの需要に応じて、必要数量が製作される「在庫なき生産」と考えられる。当然彼らは、供給を受ける集落や各集落間の首長から保護を受けることとなる。ここに言う保護関係は、力役や徭役等の免除や形を変えた首長層・集落への労働の奉仕であった（磯崎 1980）。この奉仕活動が、新たな豊饒に転化するために献納という体制を探るのである。

埴輪の生産および生産者は、この土師器生産を前提とし、首長層への献納を前提として、首長層・集落から保護を受ける関係にあったと考えられる。

第250表 古墳時代後期の窯業

	埴輪	土師器	須恵器
東海西部	○少	○少	○多
中部高地	○少	○多	○少 <sup>(2)</sup>
関東	○多 <sup>(1)</sup>	○多	○少
東海東部	○少	○多	○少
北陸西部	○少	○少	○多
北陸東部	●?	○多	○少
東北南部	○少	○多	○少

(1) 相模を除く

(2) 天龍川流域を除く

古墳築造の負担（力労）は、そのまま律令国家の徭役制度に変形されながら引き継がれる（石母田 1956、浅香 1971）。しかし埴輪生産は、一定の技術的専業性を前提とするため、増産は、個人的な負担に転化する。埴輪生産者が、等質的製品を生み出し得るのは、生産者に伝習を経た土師器工人を主体として、埴輪の生産を展開していたからである。

ところで埴輪生産にみる東国的形態とは、須恵器の生産者が埴輪生産へ関与することが、緩いことである。つまり埴輪生産者の集団構成は、埴輪製作技術の

保持者（土師器製作者内の特定埴輪製作技術者）と、一般集落から労働を提供する非技術者から構成されている。

この東国的形態は、古墳時代後期の窯業生産（埴輪・土師器・須恵器）、生産量から窯業の展開と、一般集落からの労働力の結集形態が、導き出されるはずである。

## (2) 埼玉への窯業製品の供給システム

埼玉古墳群へ供給された埴輪は、おおむね埼玉以南の各埴輪窯跡群から供給されたものである（山崎 1981）。河川輸送を前提条件とした場合、埼玉古墳群へは、河川を遡って搬送されたことになる。

なぜ大里・児玉からは、埼玉古墳群へ埴輪が供給されなかつたのだろうか。

その答は、武藏の各集落から出土する土師器が教えてくれる。埼玉古墳群集辺の集落は元来、北大竹・陣場遺跡が提示するように、和泉式土器の段階から比企型坏へ繋る系譜をもつ土器群で構成されていた。その後この地域は、須恵器坏蓋模倣坏（比企型坏を含む）の段階（TK23～TK47段階）を経て、白色系の小針型坏が展開する。ところが埼玉以西では、黒色土器系の有段口縁坏が展開し、独自の土師器の供給圏を形成していく。この背反関係は、5世紀以来の伝統的な土師器生産者のもつ経済圏の現われである。

この小針型坏の供給圏は、生出塚埴輪窯跡群の供給圏と一致し、いわば「埼玉経済圏」を形成する。この経済圏は、埼玉古墳群のもつ首長権（国造権）の影響範囲と政権の内部構造を示すかもしれない。

生出塚窯跡群で焼成された埴輪は、次の法則で供給されている（註8）。

### 1 大形前方後円墳 国造を継承し、畿内政権と交通関係をもつ被葬者の古墳

埼玉古墳群……二子山古墳・鉄砲山古墳・愛宕山古墳・瓦塚古墳・奥の山古墳・將軍山古墳  
笠原……………天王山塚古墳

### 2 小規模前方後円墳・帆立貝式古墳 1を支援し、1もしくは自己の造墓にあたり、構成員の労働力を差発権の及ぶ範囲で差発・提供する各地の在地首長の古墳

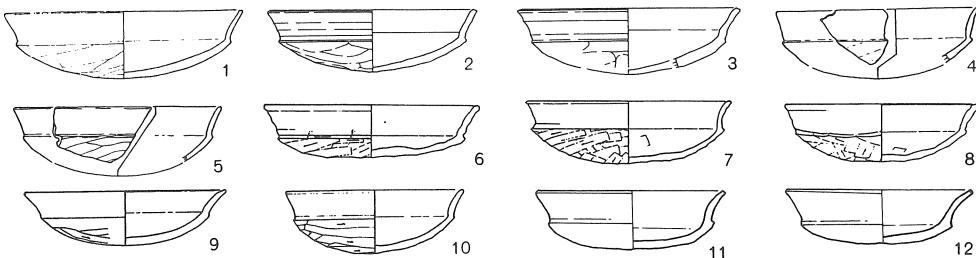
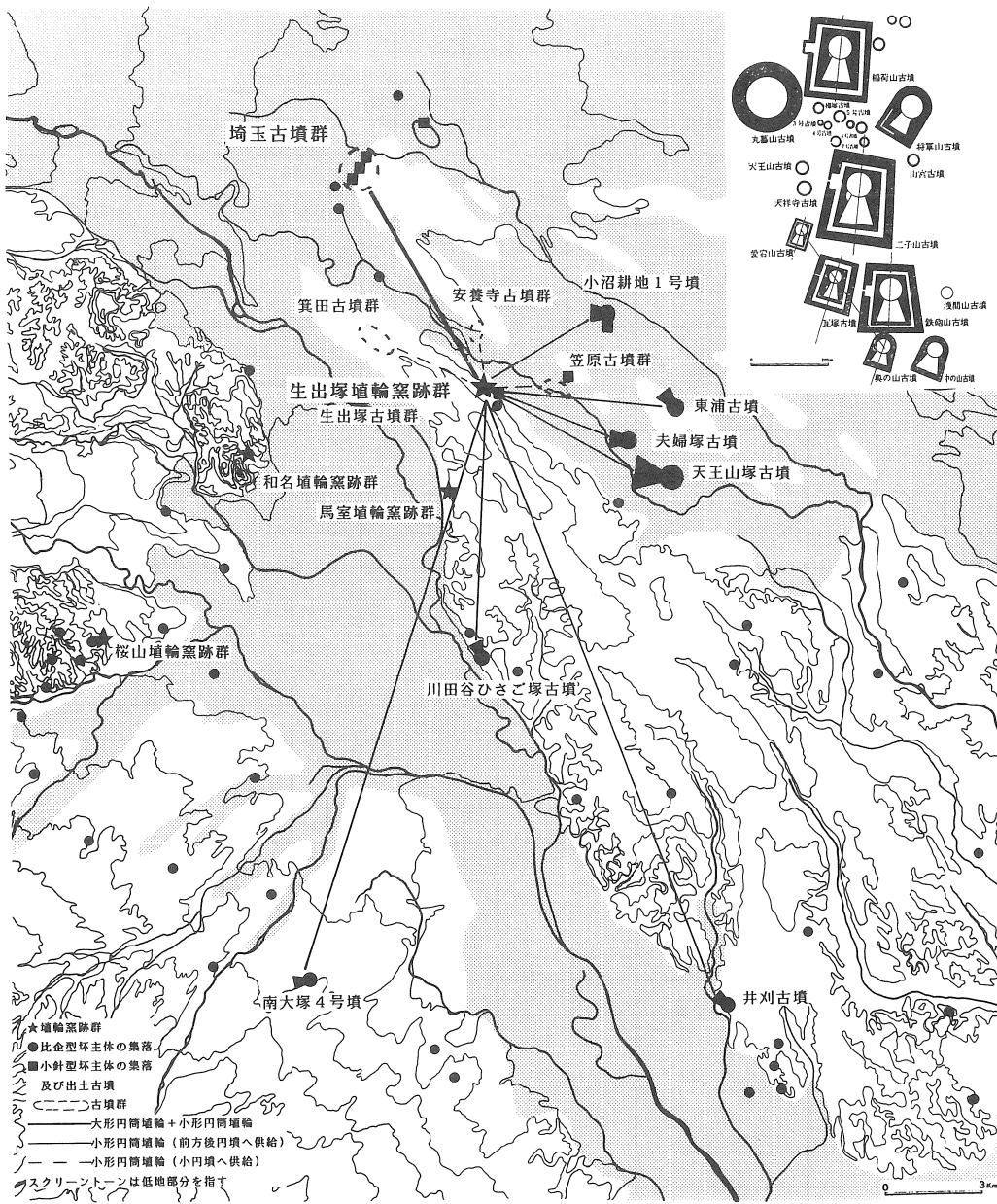
井刈古墳・川田谷ひさご塚古墳・南大塚4号墳・小沼耕地1号墳（註10）・東浦古墳

### 3 円墳 墓輪生産を直接支え、埴輪生産の労働力を力役として直接提供する集落の小首長 安養寺古墳群・笠原古墳群・箕田古墳群・生出塚古墳群の各小円墳

なお3は、生出塚以外で埴輪生産を行なう際に、技術指導的な役割を果たした可能性がある。

生出塚埴輪窯跡群から供給された埴輪による権力構造の推定が成立すれば、その生産構造は、次のように解釈できる。生出塚埴輪窯跡群を中心に、近隣の集落から埴輪生産に直接力役が提供され、また周辺の集落からは、造墓の際の盛り土や下草刈りなど埴輪生産外の力役が提供され、この力役を提供した在地の首長層へは、生出塚の埴輪の提供が承認されるシステムが存在していた。だから河川を遡るところに構築された小前方後円墳へも埴輪は供給されたのである。

そしてこのシステムを直接運用するのが、埼玉古墳群である。その経済圏は、本来いわゆる比企型坏の供給圏がその権力基盤であった。生出塚の埴輪生産機構と埴輪の需給関係に反映される「生出塚体制」は、小針型坏の出現を契機に大規模埴輪窯業を展開させた。新しい在地社会の結集方法



第607図 生出塚埴輪窓跡群のネットワークと小針型環（註9）

であった。

また小針型壺が、次の集落・古墳から出土している。行田市小針遺跡・埼玉5号墳・瓦塚古墳・鉄砲山古墳・鴻巣市生出塚1号墳・笠原古墳群・騎西町小沼耕地1・2号墳・桶川市八幡耕地遺跡・浦和市北宿遺跡・伊奈町大山遺跡等である。生出塚埴輪窯跡の製品の供給先とオーバーラップしている。

小針型壺は、埼玉古墳群中の稻荷山古墳と二子山古墳に挟まれた、小円墳群の形成過程に変化の現われる段階に出現する。小円墳群は、稻荷山古墳の構築に掛かり、TK47の須恵器蓋壺を出土した梅塚古墳を始め、3・4・6・7号墳が、築造されたと推定される。これらの周溝中からは、TK23~47の須恵器蓋壺を模倣した土師器壺が出土している。

ところが6号墳と2号墳（梅塚古墳）の間に造られた5号墳へは、小針型壺が供献されている。また5号墳のブリッジは、墳丘に対してほぼ南北である。しかし他はN-30°-Eを指している。埼玉古墳群中の前方後円墳の長軸方向は、細かな規格性のあったことが、増田氏の分析（増田 1987）から分かっている。埼玉古墳群の中では、ほかに小針型壺を使用する古墳は、鉄砲山古墳・瓦塚古墳等であるが、二子山古墳は不明である。しかし二子山古墳の埴輪を焼成した鴻巣市生出塚窯跡からも小針型壺が出土しており、供給されていた可能性はある。

また小沼耕地1号墳の場合、くびれ部の周溝底と前方部前端に圧着した状態で小針型壺が、5点セットで出土している。いわゆる供献土器として選択された土器である。武藏の後期古墳から出土する土師器を検討した結果、古墳から出土する土師器は、5世紀後葉から7世紀前半では、在地の型式の土師器を供給（供献）しているという結論を得ることができた（田中 1992）。小沼耕地1号墳の場合も、在地の集落と共通した土師器が供給されるとするならば、埼玉県東部の古墳時代後期の集落跡で使用されていた土師器の推定も可能である。

小針型壺が、生出塚埴輪窯跡群の埴輪の供給、とくに埼玉古墳群の新たな展開とかかわりがあったと考えるならば、これは、窯業における互換性に他ならない。埼玉古墳群での小針型壺の出現は、埼玉5号墳への供献の開始期に求められる。伴出する須恵器からMT15~TK10の段階とされる。一方、小針遺跡ではTK47の須恵器の伴出する段階には未だ出現しておらず、次の段階に成立する（斎藤 1984）。また生出塚埴輪窯の埴輪生産の開始期は、B種横ハケの円筒埴輪を欠くことや、出土した土師器などから6世紀の第Ⅱ四半期をさかのばらないことが、山崎武氏により検討されている（群馬県考古学談話会他 1985）。

本来の比企型壺の食膳具集団の居住域に、強引に成立した小針型壺の食膳具集団は、生出塚体制の成立を背景としていた。しかし比企型壺の食膳具集団の支援なくしては、埼玉古墳群も成立しなかったことは、彼らが営んだであろう南大塚4号墳や川田谷ひさご塚古墳・井刈古墳などへ、円筒埴輪の供給はなかったと考えられる。これらの小前方後円墳の被葬者層である首長（在地首長層）を内部に編成し、中央とのパイプ役を果たしたのが埼玉古墳群であろう。

さて新屋敷東遺跡のある埼玉以西のいわゆる狭義の北武藏・秩父の地域（荒川が、現在の星川の流路を流れ北流していたとすれば、この流路を東の限界として神流川を西の限界とした地域）は、どのように埼玉へ奉仕していたのか、あるいはそうした関係はなかったのであろうか。

第251表 墳輪生産の指標累積

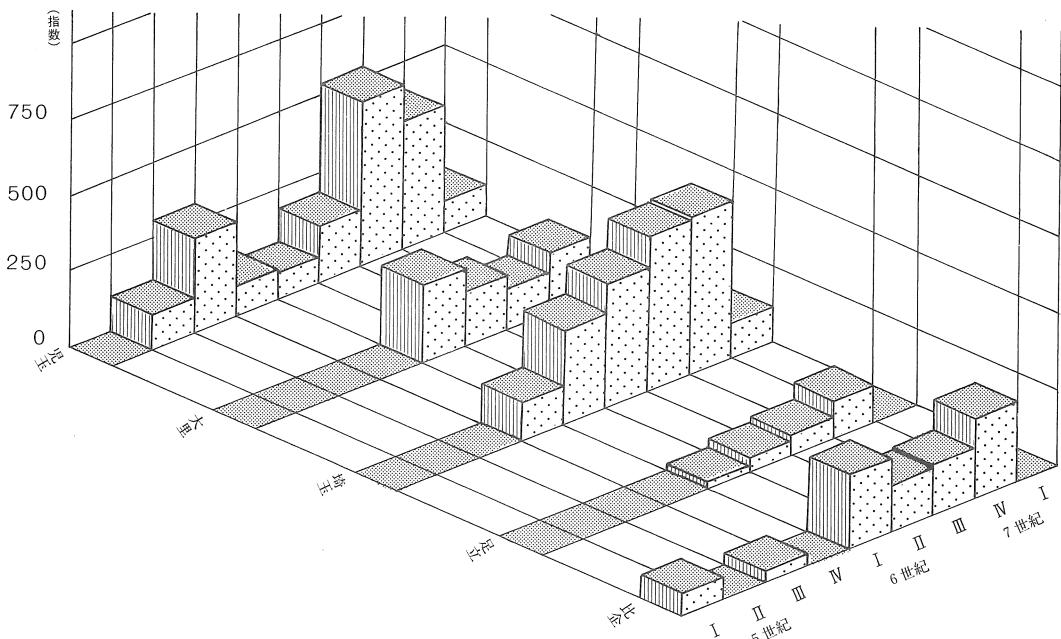
西暦		児玉	大里	埼玉	北足立	比企
5	I					78.0
	II	111.2				
	III	318.1				31.3
	IV	97.7		120.0		
6	I	79.8	262.2	307.6	11.9	250.4
	II	184.3	157.8	413.2	47.2	163.4
	III	547.5	136.1	502.7	64.5	167.3
	IV	421.4	191.2	513.2	119.8	265.5
7	I	109.1		104.0		

そこで埴輪の生産量の推移から分析を加えた。この作業は、埴輪生産の量的拡大が、どのように土師器生産に跳ね返ってきているかを探ることを目的としている。本来は、埴輪生産遺構群からの推定を試みるべきだが、工房等の埴輪生産の諸施設が整っているのは、現在のところ生出塚・桜山埴輪窯跡群の各工房群に限られている。そのため埴輪の確認された古墳から推定していく。

しかし各古墳が、全て発掘調査を経ているわけではなく、公約数的情報は、墳丘長と墳丘形態と埴輪の出土の有無だけである。そこで円筒埴輪の特徴を年代観の指標とし、円筒埴輪の樹立を芯々間距離0、埴輪列一周と仮定し、墳丘周長が埴輪の樹立個数を反映するものとする。

とすれば前方部幅2・後円部径2・全長 $1 + \sqrt{3}$ の比率の前方後円墳は、 $2\pi - \pi/3 + 4$ で求められ、同様に径 $1 + \sqrt{3}$ の円墳は $(1 + \sqrt{3})\pi$ で求められる。円墳は、前方後円墳の1.08倍円筒埴輪が必要となる。そこで墳丘長から単位数を導き、その単位数の累積から生産量を推定する。

埴輪の生産量の推移を作業前提として、さきの古墳時代後期の地域区分に従い、生産量の推移を



第608図 北武藏の埴輪生産量の推移

確認したのが第608図である。これから埴輪生産量の推移を検討すると、6世紀前葉の量的な拡大をどの地域でも確認できる。窯窯焼成技術の導入といった技術革新もさることながら、この技術の獲得の背景に、在地に埴輪の樹立を必要とする古墳が急激に増加したこと、さらにそれを支える在地の集落間のネットワークが活発化し、生産域を拡大していたことが上げられる。

埴輪の需要層の拡大は、急激な埴輪の大量需要に繋る（森田 1991）。元来埴輪の生産は、古墳の造墓を契機に展開していたと解釈すべきで、窯窯焼成技術の導入後も生産の契機は、造墓を前提にしていたと考えられる。ここで問題となるのが、大量需要を支えるための生産のシステムの開発である。このシステムは、おそらく今まで埴輪生産にかかわっていた製作者を中心に、周辺集落から非技術者を大量動員し、埴輪製作者集団として編成し、首長層への奉仕を集団として位置付ける。この集団は、生出塚古墳群・安養寺古墳群・笠原古墳群などに埋葬された者たちが形成した集団であった。

ところが、生出塚のような大規模埴輪窯の展開しなかった、言葉を変えて言えば、国造級の首長の介入のない埴輪窯では、製品の殆どが、中小の前方後円墳から群集墳の一円墳へ行き渡ることとなる。そのため凸壙数2～4段の小形円筒埴輪の生産が、急激に必要とされた。この二つの生産体制がともに展開していったところに、武藏の埴輪生産の特徴を見出すことができる。

一方、狭義の北武藏の埴輪の生産体制のあり方はどうであろう。この地域では、従来から埴輪窯20基前後的小規模窯が、大里・児玉を中心とした地域に展開されていたことが確認されている（群馬県考古学談話会他 1985）。この埴輪の生産は、各集落における土師器の製作者集団を、小規模ながら再編成して展開し、主に近隣の古墳群へ供給していた。その生産の契機は、造墓を契機に展開した。この地域の埴輪窯が小規模なのは、供給された埴輪が小形製品に限られていることや、編成された工人の数によるのであろう。

小規模埴輪窯の経営は、各集落の首長層に委ねられていた。小規模埴輪窯でも形象埴輪の生産は、土師器製作者を媒体としていたため、稚拙な製品に陥らず安定した技術保持が図られていた（山崎 1981）。省力化は、より簡易なテクニックを求め続けた円筒埴輪が背負ったのである。

土師器製作者が、埴輪生産に関与していたことは、改めて述べるまでもない。再三述べるように生出塚体制は、埼玉古墳群では二子山古墳段階に出現した窯業体制の新秩序であり、比企型壺の土師器生産体制のうえに覆い被さるように出現した小針型壺の体制である。この体制の出現は、北武藏の埴輪生産に少なからず影響を与え、小規模窯の増加と生産量増進を生み、妻沼低地で出現した有段口縁壺の広域的な生産と供給へと繋るのである。

ところで5世紀に起こった窯業革命は、窯業製品そのものの質的転換を巻き起し、東国の食膳具需要を急速に高めた。東国の生産と再分配の構造は、陶邑に代表される須恵器の集中的生産と、整った流通機構で形成された畿内的形態ではなく、各集落に窯業生産が委ねられていたとされる。また流通機構も異なる形態といわれる。

しかも東国といえども前述したように、各地域によって埴輪・須恵器・土師器の窯業製品の需要に相違があり、必ずしも須恵器生産の有無・多少から文化的な優劣を語る、あるいは畿内との遠近関係を示す指標とは成りえない。ここでは新屋敷東遺跡の土師器が成立していくプロセスを解明す

るために、関東（坂東）の特質を探っておく。しかも関東も一括りにその特徴をつかむことは難しく、さらに細かな地域性が見出せる。この地域的特徴を武器に、各集落間の社会的関係を考えていきたい。

関東的特質、それは6世紀に急激に需要の高まる埴輪の生産を、人海戦術的打開方法によって乗り切り、小円墳にまでも優秀な形象埴輪を樹立させる。しかし埴輪の製作者は、所詮、農閑期に余剰労働として、首長への奉仕で集められた者達である。埴輪の生産の呪縛が解けると、自己のあるいは所属する集落の実益的部門（耕地の拡大・群集墳内部の分化）へ転化する可能性を常に秘めていた。

しかしさきに集落の動態で見たように、埴輪生産の急速に低下した7世紀初頭を境に、こうした積極的開発を裏付ける資料は決して多くはない。むしろ新屋敷東遺跡に見たように、第V・VI期に集落の内部の竪穴式住居跡が急激に増加する現象に、その兆候を見ることができよう。つまり埴輪生産の停止による余剰労働力の集落への還元は、集落内部の蓄積として現われ、次の段階の新生集落を生み出す原動力として保存されていた。

埴輪の生産の停止が、他の窯業形態の質的転換にかかわらず、6世紀的な土師器・須恵器の生産として、7世紀にも引き続き展開していた。これは埴輪の生産が、他の窯業経営を侵さない経営手段で営まれていたためと考えられる。それは、土師器の生産と埴輪の生産は、異なった季節・時期（契機）に行なわれたか、異なる製作者によって生産されていたためである。ただし後者は、埴輪製作者を専業者として考えなければならず、地域的特色の強い埴輪の製作が、果たして専業的な工人を生み出すまでに至っていたか疑問である。

そこで製作の契機の違いが、6世紀の土師器生産形態を7世紀に引き継ぐ背景にあったと考えておきたい。むしろ埴輪生産の解体がもたらしたものは、集落内部の再生産力の増長と個別的な所有の拡大、そして更なる再生産へ向けての群集墳の積極的な造墓の展開であった。

### (3) 土師器生産と6・7世紀の武藏

古墳時代の土師器生産の特色を考察した諸論考は、残された文献資料を手掛りとして、王権と畿内の生産者にかかる問題が中心であった（浅香 1971、田中 1966、横山 1961等）。しかしそれは、窯業生産の大半を須恵器が占め、土師器は煮沸具や一部の食膳具に限定される、畿内的な窯業生産を前提とする考察であったことは言うまでもない。煮沸具はもちろん食膳具をも土師器で構成する関東的形態とは、自ら異なった生産形態がとられていたことは予測される。ここでは土師器生産の関東的特色を考えておきたい。

関東の土師器の生産の特色は、第一義的に集落の需要を満足させ、第二義的に集落間の上部（首長層）の食器を支え、第三義的に土師器型式枠外の周辺集落へ交通関係の明かしとして供給することを目的とする。またその副産物として、墳墓や祭祀遺跡等に使用される。関東の土師器生産は、需要を見込んだ生産や、製品の備蓄といった畿内の須恵器のもつ流通システムへは移行しなかった。集落や首長層は、土師器工人が、このシステムへの転身を要求しなかったためである。

ところで関東地方では、須恵器を巧妙に模倣する土師器が製作されたことは、関東の土師器工人

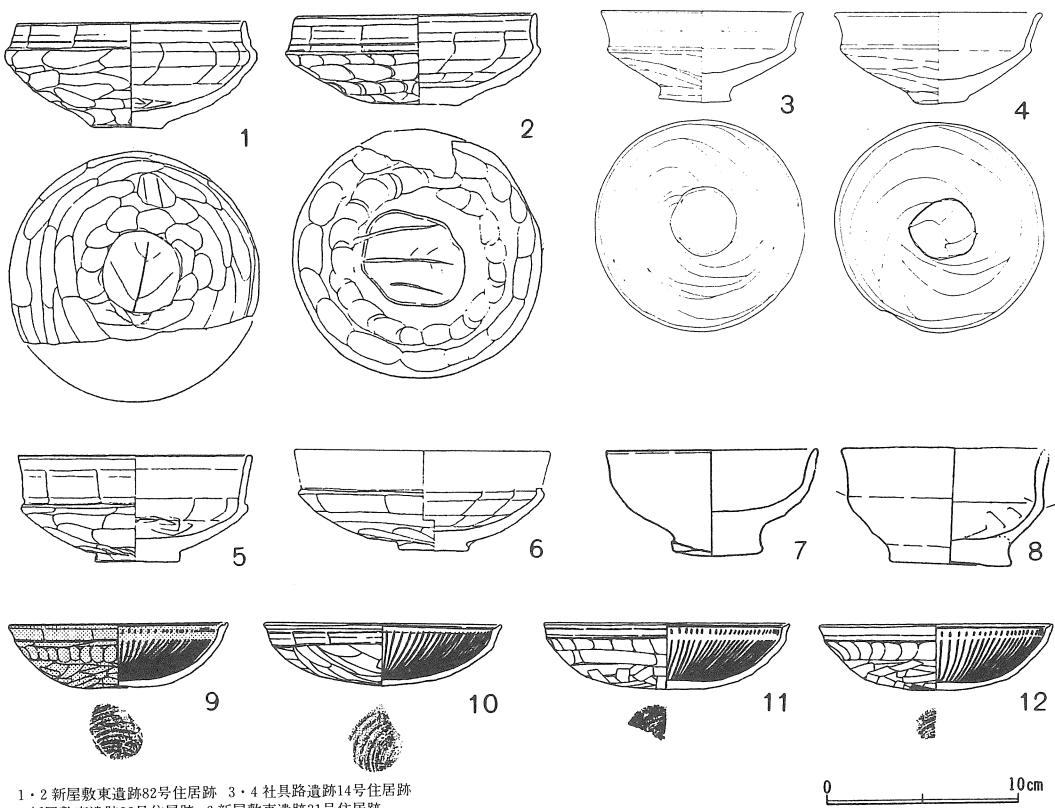
達が、技術的に劣っていたことを否定する。食膳具の製作技法を確認することで、それを証明しておきたい。

**第Ⅰ工程 [成形]** 底部を削り落さず焼成した製品から、成形の手法を観察できる（第609図）。殆どの食膳具の底部は、暗文土器を除き木葉痕跡が見られる。まず木の葉の上に粘土塊を載せ、底部を成形する（註11）。この底部の縁に粘土紐を巻きつけ圧延し肩部まで椀形に作り上げる。木の葉が台との摩擦を調節し、成形を補助する。（橋本1987）。

**第Ⅱ工程 [口縁部調整]** 口縁部・口唇部を調整し、器形を整える。この時点では食膳具の型式（同一の食膳具をもつことによる集団関係の確認）が決定される。武藏では、6・7世紀の食膳具に口縁部の成形手法から4形式を設定できる。

- |                       |                     |
|-----------------------|---------------------|
| a 口縁部の調整技法を欠いた粗製土器    | ①M形土器               |
| b 口縁部の細かな成形・調整を経た精製土器 | ②須恵器坏蓋模倣土器（有段口縁を含む） |
| ”                     | ③須恵器坏身模倣土器          |
| ”                     | ④須恵器の形態に関わらない土器     |

口縁部は、全てヨコナデされ、器面が平滑に仕上げられる。ただしロクロ調整のように口縁部を



1・2 新屋敷東遺跡82号住居跡 3・4 杜具路遺跡14号住居跡  
5 新屋敷東遺跡22号住居跡 6 新屋敷東遺跡31号住居跡  
7 後張遺跡28号住居跡 8 後張遺跡29号住居跡  
9～11新屋敷東遺跡121号住居跡 12新屋敷東125号住居跡  
※1～8は底部削り残し（柱状）9～12は静止糸切り痕

第609図 土師器の底部調整

一気にヨコナデしているのではなく、器面の観察から断続的に数単位に分けてヨコナデ（断続ヨコナデ）している。口唇部は、凹状の面をもってつくられ、外稜も巧妙につくられている。端部までも形態的に模倣され続けた。

### 第Ⅲ工程 [器面調整] 器面の仕上げとして底部及び内面に施される調整

a ヘラケズリ 木葉痕の付いた高台状の部分を切り放し、器壁を薄く造るために、不要な粘土を刀子などの金属器等で削り落す。その手法は、まず一定方向に削り落す（底部ヘラケズリ）。その後周辺部を数回にわたって回しながら削り落す（周辺ヘラケズリ）。口縁部を持ちながら行なうため、口縁部にまま爪跡が残る。このとき薄過ぎて穴が明いたものもある。

b ヘラミガキ 乾燥の直前に棒状工具やヘラの背などで、主に内面の器表をこすり光沢をもたせ

第252表 6・7世紀の関東地方北西部の食膳具

型 式	出 現	器 種	ヘラミガキ	法量	仕 上 げ	分 布 域	消 滅
内斜口縁坏	TK 208	椀・坏A・B・高坏	斜行放射状	一定	黒色処理(少) 橙色粘土	西毛～児玉 上野～武藏	MT 15 TK 217
須恵器模倣坏	TK 208	模坏身従・模坏蓋重・高坏	—	変化	—	—	—
有段口縁坏	TK 10～	模坏身・坏蓋 A・B・C・高坏	放射状(底部 外面あり)	変化	黒色処理(多) 灰白色粘土	東毛～北武藏 東武藏	8世紀中葉 TK 43
小針型坏	MT 15	模坏身・模坏蓋	—	変化	赤色塗彩	南武藏	8世紀中葉
比企型坏	TK 208	模坏身・模坏蓋・坏身・高坏	放射状	変化	橙色粘土	下総北部	TK 43
大谷口型坏	MT 15	模坏身・坏身・高坏	放射状	変化	—	—	—
暗文土器	TK 46	坏・椀・鉢・盤・高坏	放射状・雷 状・螺旋状	分化	黒色処理(少) 橙色粘土	児玉除く北武藏 関東地方全般	8世紀中葉 8世紀
内屈口縁坏	TK 46	坏	—	分化	—	—	—

る。斜行放射状や、花弁状・螺旋状・雷状等がある。形式による文様の選択がある。

第Ⅳ工程 [焼成・彩色] この工程では、焼成後の食膳具の色調が、如何なる色に焼き上るかが問題となる。製品の色調が、使用する集団間の共通性を浮き彫りにさせるためである。方法は次の3

第253表 北島型暗文土器と有段口縁坏

		北島型暗文土器		
		I	II	III
有 段 口 縁 坏	IV	小角田前 168住 白山19住 東川端26住 東川端28住 東川端35住 樋の上50住		
		甘柏原4住 東川端36住		
有 段 口 縁 坏	V	樋の上19住 北島5-24住 北島5-28住	白山20住 白山63住 東川端6住	東川端4住 東川端32住 内出9住
		東川端26住 東川端34住 東川端37住 東川端38住 東川端39住 東川端円形 周溝墓 下辻12住 飯塚南23住		

a 粘土選択 焼き上りの色調を見込んだ粘土を選択し使用する

b 黒色処理 焼成方法の開発により、表面を黒色に仕上げる

c 赤彩処理 焼成後、器表に赤色の顔料を塗彩し仕上げる

このように例え口クロを使用せずとも、口唇部形態や外稜・器厚等を几帳面に模倣する技法が、発達している。須恵器との違いは、胎土と焼成技法だけである。以上の特徴を個々の食膳具に照らして考えたとき、次のような型式観を見ることができる。

食膳具の各型式間の併行関係を述べておく。

須恵器模倣坏は、基本的には須恵器坏蓋の型式変化に

第254表 有段口縁壺と比企型壺

期	遺跡・遺構	比企型壺
I	歌舞伎17住	II
	船田C10住	II
	中田8住	II
	多摩川台3号墳	II
II	高峰S B11	II
	小角田前110住	III 1
	宇佐久保4住	III 1
	氷川神社北方3住	III 1
	氷川神社北方25住	III 1
	高峰S B127住	III 1
	曾谷3住	III 1
III	宇佐久保4住	III 2・3
	船田B49住	III 2・3
	上の台Y62住	III 2・3
	上の台U57住	III 2・3
	上の台2A65住	III 2・3
	上の台2A49住	III 2・3
	上神明17住	III 2・3
IV	神山2住	III 2・3
	入間城山5住	IV
	金井55住	IV
	弁天池北S B8	IV
	金井6住	IV
	駒堀11住	III 1
	飛田給S 119	IV
V	金井35住	IV
	金井3住	落川9住

産を5つの画期をもとに発達段階を説明したい。先の埴輪生産の部分と重複する部分もあるが、土師器生産の発達段階を探るために記しておく。

第1の画期 食器の中心が、高壺から壺へ転換する段階。供膳具から食膳具への転換。壺の急激な需要量の上昇は、系譜の異なる土師器工人達が、在来の器種の壺を拡大生産することで賄

一致するためここでは省く。小針型壺は斎藤分類（斎藤 1984）、比企型壺は水口分類（水口 1989）、内屈口縁壺は赤熊分類（赤熊 1988）、大谷口型壺（註12）は、房総古文化研究会分類（房総古文化研究会 1987）、有段口縁壺と暗文土器は筆者の分類（田中 1991 a・b）を使用し、各型式の併行関係を一覧表によって確認しておくこととする。

内斜口縁壺に限り、型式学的な確認を行なっておく。

内斜口縁は、口唇部を斜めにS字状に仕上げ、内面に稜をもつ口縁部の形態を指す。しかしここでは広義に内斜口縁壺をとらえ、内面に斜行放射状へラミガキを施す一群を指す。口唇部形態によりa・b・c類に分類することができる。a類 外面に緩い凸状を成す。b類 緩いS字状となる。c類 特殊な形態を成さず素口縁。また形式的には、壺・壺・須恵器壺蓋模倣壺とこれらを壺部とした高壺の器種を設定することができる。変化の方向性は、口縁部の形態変化、ヘラミガキの消滅化である。

第253～257表から関東地方北西部の古墳時代後期の土師器の型式学的な変化を読むことができる。そこでこれらの型式の土師器の生

第255表 内斜口縁壺と須恵器の伴出関係（各報告書から）

須恵器	壺a	壺b	壺c	壺
T K 208	荒砥北原7住	荒砥北原7住 温井10住 荒砥島原E区 7住 後張50住	荒砥北原7住 温井10住	
T K 23	諏訪49住 後張88住○	小神明九料48住 後張88住○ 穴池12住 後張4住 後張92住○ 後張45住○	小神明九料48住 諏訪49住	
T K 47		正觀寺45住 生原善龍寺 S B5 後疋間2区土 器だまり 井出村東108住 芦田貝戸F A 水田 黒井峰祭祀跡	正觀寺45住 生原善龍寺 S B5	生原善龍寺 S B5 後疋間2区 土器だまり
M T 15		引間32住 温井7住 井出村東15住	引間32住 温井7住 温井14住	引間32住

註 ○は、内面にヘラミガキの施されていないもの。

榛名山二ツ岳噴出火山灰層（F A）の堆積をここでは、T K 47～M T 15としておく。

第256表 在地産須恵器と北島型暗文土器の共伴関係

		北島型暗文土器			
		I	II	III	IV
在地産	I	八幡太神南1住			
	II		清水谷18住		
	III	白山20住 樋の上19住			
	IV	新屋敷東115住 北島5-30住 水深42住	飯塚南23住 飯塚南SK08 東川端5住 東川端15住 東川端28住 白山71A住 台61区18住 三ツ木217住	東川端SK54 電雷下49住	
	V	白山47住	水深49住 水深40住 新ヶ谷戸1住 下辻12住 下辻19住 白山52住 楽前65住	若宮台60住 北島5-9住 白山18住 白山50住 上敷免2住 下辻14住 東川端45住 樋の上64住 古井戸121住	
	VI		東川端SK1	水深23住 三ツ木233住 東川端32住 下辻18住 内出9住 内出15住 立野南2住	清水谷15住 北坂14住 電雷下2住 若宮台60住 白山62住 白山35住 白山17住 東川端47住

なわれていた。ただし窯業体制は、既存の生産の一部門を拡大しただけで抜本的な変革は訪れていない。

布留式土器と和泉式土器の関係や伴出須恵器などから、TK73~TK208前後であろう（坂口 1986）。  
〔新屋敷東遺跡第I期〕

第2の画期 食膳具の多量需要は、ついに在地の食膳器の生産を飽和状態にする。この需要を満たし、安定供給を続けるため、在地の土師器生産は、器形の画一化による大量生産に突入した（田中 1992）。武藏では、須恵器「坏蓋」を細部まで精緻に模倣し、食膳具の中心に位置付けた。須恵器の模倣は、すでに第I期にも見られるが、主要型式として確立するまでには至らなかった。

例え須恵器の模倣が、畿内文化への憧憬でも、画一的な器種の生産を様々な系譜の工人等に課したのは、首長層の強権による土師器工人の再編成にほかならない。

しかも坏模倣が、「蓋主身従」の原則を守っ

第257表 有段口縁坏と須恵器の共伴関係

期	遺跡・遺構	器種	型式	上の台2 D34住	坏身	TK209		柴崎5次11住	高坏脚部	TK209
I	飯塚南25住	坏蓋	TK10	東谷14住	坏身	TK43	IV	甄姫神社26住	坏身	TK217
	道ヶ谷戸10住	坏蓋	TK10	下棒17住	坏身	TK43		矢作8住	坏身	TK217
	田端19住	有蓋高坏	TK10	大久保A170住	坏身	TK43		矢作5住	坏身・蓋	TK209
	三ツ木28住	有蓋高坏	TK10	桧峰	無蓋高坏	TK43		有吉70住	坏身	TK209
	舟橋1住	有蓋高坏	TK10	海行AS B29	坏身	TK43		宇佐久保2住	越	TK209
	上の台2Q-46	坏身	TK10	村後14住	坏身	TK209		新ヶ谷戸1号墳	プラスコ	TK217
	南大通り線内60住	無蓋高坏	TK43	小室C108住	坏身	TK209		柳久保37住	坏蓋	TK217
	光屋敷17住	高坏	TK43	荒砥二の堰54住	高坏	TK209		樋の上22住	坏身	TK46
II	社具路49住	無蓋高坏	TK43	大井東山18住	坏蓋・身	TK209	V	白山20住	坏身	TK46
	鶴ヶ谷35住	有蓋高坏	TK10	III 大井東山19住	坏身	TK209		北島5-10住	坏身	TK46
	社具路80住	高坏脚部	TK43	歌舞伎74住	短頸壺	TK209		柳久保86住	坏身	TK46
	中道S B01 A	坏蓋	TK43	歌舞伎71住	高坏	TK209		飛田給S I 19	坏蓋	TK46
	歌舞伎A49住	坏身	TK43	歌舞伎A55住	高坏	TK209		金井35住	坏蓋	TK46
	水川神社北方25住	坏蓋	TK43	光屋敷1S住	坏蓋	TK209		芳賀H-126	長頸壺	7末~8初
	小角田前45住	越	TK43	椎名崎75住	坏身	TK209		歌舞伎A76	坏身	7末~8初
	大井東山54住	坏身	TK43	有吉195住	坏身	TK209		東川端28住	坏蓋	7末~8初
	新川上A5住	坏身	TK43	上神明23住	坏蓋	TK209		東川端39住	坏身	7末~8初
	上の台V60住	高坏	TK43	舞台D96住	短頸壺	TK209		下辻12住	坏身	7末~8初
III	小角田前26住	越	TK209	引切塚17住	坏身	TK209				
	小角田前120住	越	TK209							

たことは、東関東や東北・北陸・中部高地・東海の土師器生産とは抜本的に異なり、首長層の結集形態や経済圏の違いを反映するものである。坏蓋の本来の機能を土師器工人たちが錯綜し、坏身として模倣したなどという牧歌的なものではない。模倣される須恵器坏蓋の形式からT K23～47前後であろう。

[新屋敷東遺跡第Ⅱ・Ⅲ期]

第3の画期 坏蓋模倣坏の成立から程なく、南武藏（比企から多摩）と東武藏（埼玉）に系譜の異なる食膳具が成立する。比企型坏、小針型坏の登場である。

比企型坏は、韓半島の赤焼き土器から系譜を引くとも、在来の和泉式土器から成立したとも言われる。薄い造りの土器で、内面と外面の口縁部を赤色に塗彩することを特徴とする（水口 1989b）。すでに第Ⅱ期にその萌芽が見られる。小針型坏は、坏蓋模倣坏の系譜を引き、須恵器坏の大形化と前後して出現した。口縁部は外反しつつ立上がり、白色に焼き上った硬質の食膳具。

比企型坏は、広範な地域に長期に及び供給された。これは土師器生産を搖るがす政治的結集体がなく、動搖をいざなう土器が出現せず、在地の土器生産が強固だったためであろう。比企型坏の場合、坏・小形壺・甕・高坏から円筒埴輪に至るまで、赤色顔料が用いられている。たとえ自然に豊富に産するものであっても、これを定量賄うための供給のシステムがこの経済圏には、完備していくなくてはならない。そのルートの確保から採出量の調節まで、在地首長層を媒体とした交通関係が利用されていたと考えられる（石部 1965）。なお古墳時代後期の関東地方の赤彩土器は、南武藏と房総で見られる。

[新屋敷東遺跡第Ⅲ期]

第4の画期 北武藏では、小針型坏の出現にやや遅れ、利根川の乱流地帯を中心に有段口縁坏が成立する。外面は漆塗ではないが、黒色処理され、東北地方の黒色土器の影響を受けている。北武藏の坏蓋模倣坏の供給圏と重なり、比企型坏の供給圏には、ほとんど確認できない。

第4の画期は食膳具の供給圏が、明確化する段階である。東武藏の白、北武藏の黒、南武藏の赤の土器の供給圏が、埼玉古墳群を要に成立していた。しかし有段口縁坏の登場後、白の小針型坏は急速に生産量を低下させる。そして黒と赤の土器の対峙する食膳具の供給圏が成立する。和田吉野川一元荒川一江戸川をむすんだラインが境となる。

有段口縁坏は、上毛野の平野部の食膳具の生産体制までも巻き込み、在地の諸関係を内部から歪曲させた。それは、在地首長層間の動搖が、古墳の造墓として反映されている。この状態は、T K10～T K43から始まりT K217～T K46まで続く。

[新屋敷東遺跡第Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ期]

第5の画期 第4の画期以降、在地の土器生産は、安定的な傾向が見られた。しかし7世紀後葉になると北武藏の特定の地域、大里・幡羅・埼玉・榛沢で暗文土器の生産が開始される。

畿内とくに宮都の暗文土器からテクニックの連携が見られる。飛鳥・平城分類の坏C、盤・鉢を主に模倣し、内面に放射状の暗文のみ施文する。しかし暗文土器の生産は、在来の土師器の生産体制を転覆させるまでは至らず、食膳具の2～4割程度を賄うに留まった。工人は畿内から直接招来し、在地の工人と再編成されて成立した生産体制で生産された。

武藏の他の地域では、暗文土器の補完はなく、在来の型式の土師器と、内屈口縁坏（真間式土器）による食膳具を構成していた。やや遅れて児玉・末野・南比企・南多摩等の各須恵器窯が、大量生産を開始し、各集落へ製品を供給し始める。土師器の工人たちは、須恵器の工人として一部は





第 610 図 新屋敷東遺跡と周辺の発掘調査と古墳時代以降の遺構

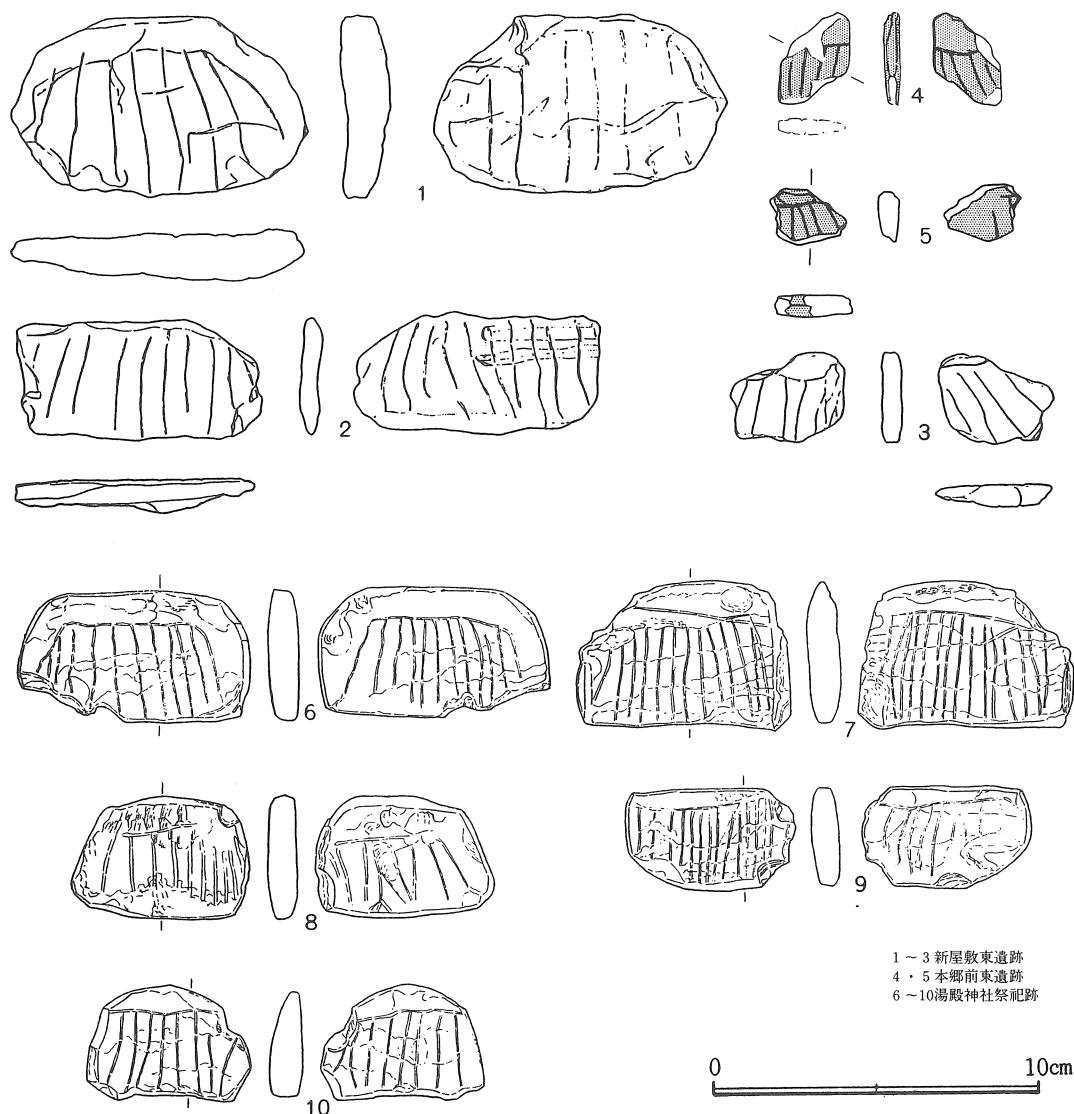
再編成された。土師器は、煮沸具中心の生産へ徐々に変質していく。だが土師器の生産は、払拭されることはなかった。

在地の経済圏が明瞭だった古墳時代後期的な様相は後退し、在地内窯業への国家の介入・製品のコントロール（特定商品の生産・流通機構への関与・工人の派遣等）が露骨になった（田中 1991）。

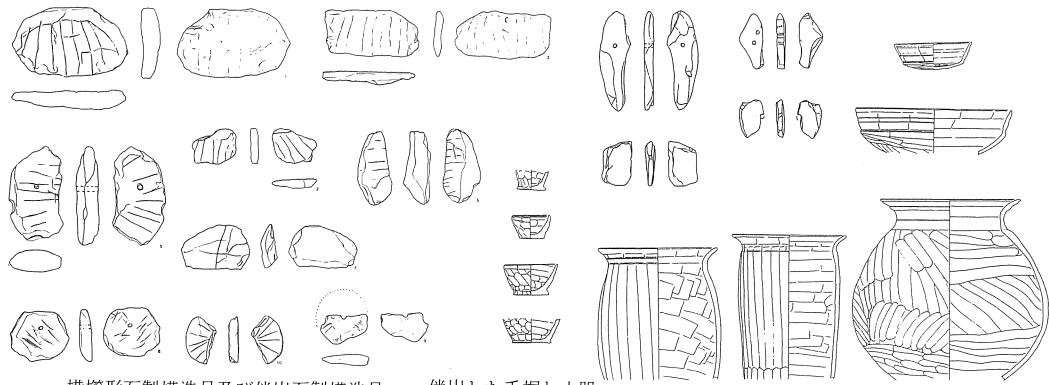
第V期は、大振りの台付壺やリング状つまみ蓋等の伴出から、7世紀後葉、天武・持統朝から8世紀初頭を考えておきたい。

〔新屋敷東遺跡第VII期〕

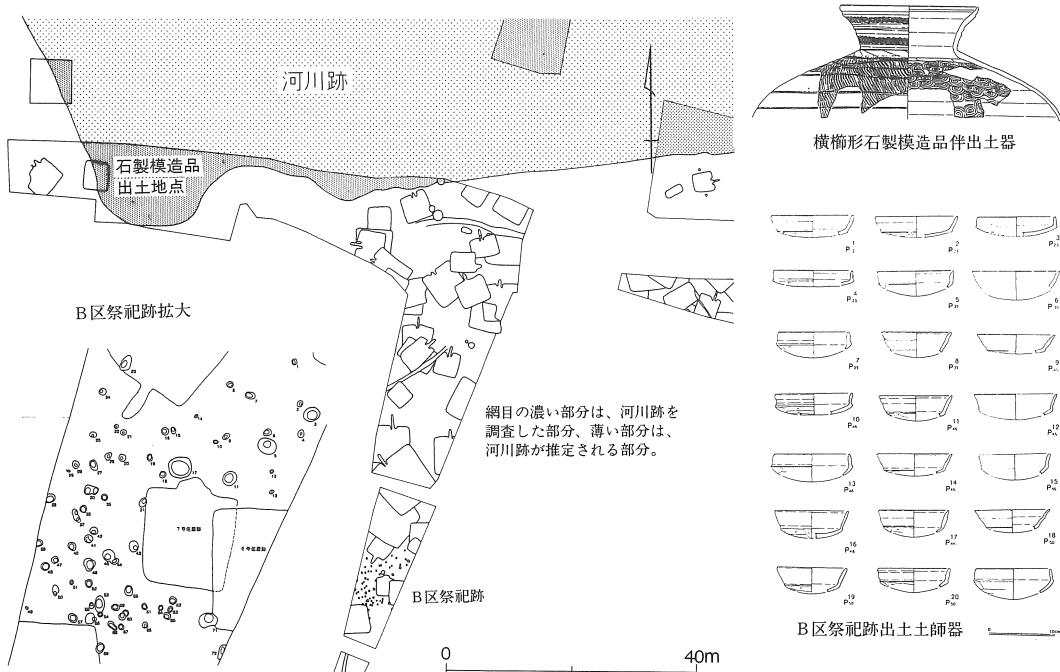
さて、共通の型式の食膳具で結ばれた集落は、土師器の生産・消費が、共通の媒体（流通機構）であったと考えられる。つまり集落間に取り結ばれた首長層への貢献の分担・協力体制を背景とす



第 611 図 横縦形石製模造品



横櫛形石製模造品及び伴出石製模造品 伴出した手捏ね土器



第 612 図 横櫛形石製模造品出土地点周辺の遺構と遺物

る経済圏が、土師器の供給圏を通して成立していたと想定できる。

この経済圏は、水田への用水系や共通する耕地条件等から醸成された集落を、古墳時代後期に再編成し成立している。一方、多量の壺を必要とする食膳形態は、「春時祭田」のような短期間に集中的に労働力を確保した実態を反映する供餐等を示すのであろう。

### 3 古代の開発と石製模造品

新屋敷東遺跡で発見された石製模造品は、①河川跡の縁辺部で確認されている、②7世紀前半の土器（新屋敷東遺跡第VI期）が伴出している、③成形が粗雑で何を模造したのか分かりにくい、④本郷前東遺跡で確認された遺構・遺物（川口 1989）と関連する、⑤石製模造品の組成は、刀・鉄鎌・有溝円板に加え、櫛形・馬形が存在する等から、7世紀の水利にかかわる再生を祈願した行為（水の祭祀）が、新屋敷東遺跡を軸に行なわれていたことを示す。

他の石製模造品はともかく、櫛形・馬形の石製模造品は、奈良時代以降に井戸や溝等から斎串等と伴い発見される牛馬骨・土馬・櫛等のいわゆる律令的祭祀の先駆的形態を示している。とくに横櫛形石製模造品の発見例は、熊谷市湯殿神社祭祀跡で確認されているに過ぎず、櫛そのものの変遷、横櫛の成立を考えるうえでも重要な資料であろう（註13）。

注目すべきは、湯殿神社祭祀跡と新屋敷東遺跡の「水の祭祀」の共通性である。湯殿神社祭祀跡の石製模造品は、熊谷市別府の湯殿神社裏の湧水堀から出土し、櫛引台地縁辺部の崖面の湧水を対称とした祭祀遺跡とされている（大場・小沢1963）。しかしこの考え方を否定するわけではないが、福川が形成した三ヶ月湖である別府沼が、福川の流路の度々変転によって形成されていたことを考えると、旧福川のある河道が、用排水として古代の開発に関わった可能性は大きい。とくに深谷市清水上遺跡などで確認されている耕作痕跡は、それを裏付けることはあっても否定することはない。

新屋敷東遺跡も旧福川の一支流が、集落の北側を流れ、集落の成立と深く関わっていた。水利を背景にした再生の祭祀が行なわれたことは推定される。B区祭祀跡とされるこの空間は、群在する小さな柱穴状の落ち込みによって、概ね方形に区画され、刀・鉄鎌・有溝円板に加え、櫛形・馬形の石製模造品が出土している。またこの区画からは、多量の壺型土器が出土している。その内訳は、有段口縁壺（15）壺身模倣壺（6）土師器甕の口縁部破片からなる。

一方、新屋敷東遺跡の石製模造品が確認された場所は、河川跡が大きく南にえぐり込まれ緩い入り江状になったところである。この部分に集中して今回報告した石製模造品が出土している。共伴する遺物は、食膳具は少なく、2点の煮沸具と2点の貯蔵具（須恵器・土師器1点づつ）から構成される。また鉢形をした手捏ね土器が、4点組成に加わっている。

出土した土師器の共伴関係や両遺構の距離等から、両者が一つの完結した行為の痕跡と考えて良い。その行為を復元すれば次のように推定される。B区祭祀跡を石製模造品を媒体とした共食の跡とし（川口 1989）、今回の資料を祭具の河川への投棄の痕跡とする。石製模造品が、7世紀まで集落の祭祀に関与していたことを示す。ここで大宝令の解釈書である古記の「春時祭田」条に見られる「卿飲酒礼」の記載が、喚起されないわけにはいかない。

大町健氏は、酒肴を振る舞い労働力を差発する形態を、延暦9年（790）4月16日太政官符より検討し、「共同体の祭祀における飲食が労働力編成の契機として重要であったこと」を解いている（大町 1986）。つまり「春時祭田」の「郷飲酒礼」的な儀礼を通した、耕地拡大や古墳の造墓を含めた労働力の結集が、大化前代から存在していたことを示唆してくれる。

一方、出原恵三氏は、西日本の水辺に展開された祭祀跡をI～V類型に分類し、義江彰夫氏の村落祭祀と公出舉制の考え方（義江 1986）から引用し、「I類→II～V類への変化は、在地における生産力の発展に照應した祭祀形態の変化として把握すべきものであり、VI類の成立と展開は、特權的司祭者による共同体員の統合の新たな段階を示すものである。（中略）在地の共同体単位で行なわれたIV類祭祀の解体・形骸化の過程の中にこそ、統合の段階を読み取らなければならない」と結ばれている（出原 1990）。

古墳時代後期の集落の一定空間から、食膳具を中心とした大量の土器が出土する場合がままあり、川湖・海の岸辺等で、執り行われた「祭祀」と報告される場合が多い。出原氏の行なった資料操作は、西日本の資料から導き出されたために、直訳的に東国の集落には反映できない。

これを受けた辻本和美氏は、福知山市石本遺跡出土の土器群の分析を通し、「畿内政権と結び付くことにより、新たな技術や思想を導入し、それによって農業生産の増大と村落共同体員間の統率を図ろうとした在地首長層の要請にあったものと思われる。」と、畿内政権の周辺部に位置する集落の性格を祭祀と関連し述べられている。

新屋敷東遺跡で確認された石製模造品も、河川跡に臨む水辺の儀礼・祭祀を支える重要なファクターの一つではなかったろうか。しかし、「春時祭田」条をめぐる解釈は、義江彰夫氏をはじめ、多くの人々によって行なわれているが、考古学的な資料を駆使したものは、漸く途に付いたばかりである。

## まとめ

以上、新屋敷東遺跡について、北武藏・北西関東、そして東国の6・7世紀を、窯業生産と集落の動態というフィルターを通して考えてきた。北武藏という地域の内的動態を分析し、新屋敷東遺跡がどのような地域内の変容のなかで存在していたかを考えた。

東国窯業形態が、食膳具の独自の展開から裏付けられ、その供給圏の集団関係は、6・7世紀の具体的な境界意識を反映している。この境界が、果たして6・7世紀のクニを前提とするものであるかは明らかではない。しかし少なくとも新屋敷東遺跡が、6世紀後葉をターニング・ポイントとして、再編成される実態を如実に示しており、この事実は、埼玉古墳群を含めた武藏内部の変動に反映している。

埼玉古墳群に代表される在地の諸関係と、『日本書記』の安閑紀の武藏国造をめぐる記載が、在地の土器生産にどのように関係するか次に記しておきたい。

安閑天皇元年閏十二月条記事は、以下の点に要約される。

### 1 「武藏国造」を笠原直使主と小杵が争奪する

国造権が在地首長層の同族間の争いになるまで、在地内の諸関係に重要な権益を持っていった。

## 2 上毛野君小熊が小杵を支援、朝廷が使主を支援

在地首長層間に有事の際の支援体制が成立している。畿内の権威化された紐帶を持つ。

## 3 使主が「四処屯倉」を朝廷の管理下に置く

屯倉的経営の開始を武蔵国造の内紛と関係させた形で掲載。

これが、書紀の編者による屯倉設置の安閑天皇紀への編集作業であったとしても、この記事は、古墳時代後期の武蔵・上毛野における在地首長層間の諸問題を的確に表現していると考えられる。

必ずしも比企型壺と須恵器模倣壺との相克に、この争いを此定するわけではない。しかし比企型壺の供給圏内に、6世紀第Ⅱ四半期、突如として小針型壺が登場し、生出塚埴輪窯体制が成立するこの局面は、武蔵の内部に在来の諸秩序を再編成させる動きがあったことを裏付けている。

奇しくも埼玉5号墳から、埼玉古墳群の内的変化が始まることと一致している。「四処屯倉」の信憑性はともかくとして、各屯倉の比定地は、比企型壺の供給圏内に当たる。新たな経営方式である屯倉的経営を南武蔵・比企（横渟）へ導入したことは、生出塚体制の政策的一面ではなかったろうか。この生出塚体制が果たして畿内から直接導入されたものかどうかは明らかではないが、埴輪の製作技法の点検・生産体制の類型化から明らかにされていくことだろう。

一方、この段階（第IV期）に北武蔵のとくに児玉・大里の各集落で、堅穴式住居跡の構築数が減少する傾向は、無視することのできない事実である。この事実が、埼玉古墳群の展開と不可分の関係にあったことは繰り返し述べている。

在地首長層間の紐帶の実態を示す埴輪の生産と供給体制、それを前提付ける土師器の生産と供給体制の存在は、互いに不可分の関係にあり、その発達は、集落内部の発達と首長層間の交通関係に求められることを確信する。

本稿をまとめるに当り、以下の方々にお世話になった。記して礼に代えたい。

新井 端・斎藤国夫・坂口 一・澤出晃越・寺社下博・鈴木徳雄・塙田良道・坂井秀弥

酒井清治・森田克行・高橋一夫・鳥羽正之・平田重之・宮瀧交二・山崎 武・渡辺 一

## 註

1 かつて古墳時代後期の集落論の展開は、集落内の個々の遺構（堅穴式住居跡等）の単独的調査では不十分で、集落の全体に及ぶ調査の必要性が解かれてきた。その後大規模開発に伴い、台地全体や周辺の耕地に及ぶ調査が行なわれ、集落内の面的な構造が明らかになってきた。一方、黒井峰遺跡や中筋遺跡など、火山灰や火碎石に覆われた遺跡が調査され、一集落の具体的な状況が解明されつつある。しかし各地で行なわれた大規模発掘をもとに、集落を横に結ぶ研究は、それほど進展したとはいえない。ここでは新屋敷東遺跡を中心とした北武蔵の集落の横の関係を、蓄積された資料をもとに再検討する。

2 作業前提としての地域区分は、便宜的に令制下の郡をもとに考えることとする。

児玉一加美・那珂・児玉

大里一大里・男衾・榛沢

## 埼玉一埼玉・足立

- 3 古墳時代後期の集落の占地は、以下の特徴を与えられる。すでに古墳時代前期（5世紀）までに水稻可耕最適地（簡便な用排水路の設営によって、耕作を可能とする場所）の開発が終了し、畑作・桑作をふくめた耕地の拡大を開始していた。この耕地の拡大は、水利を媒体に数集落の共同による大規模開発である。新生集落の空閑地への出現は、耕地の拡大を前提に考えられる。その点で古墳時代後期集落は、水利権を左右する在地首長層の主導による計画村落と考えられる（石母田 1971）。ただし後の条里制や莊園の成立、柵の設置等にともなう国家権力や貴族層が主導し、編成した「計画村落」（直木 1965）とは異なり、在地内の諸関係の新展開として出現してくる集落である。そこでここでは「古墳時代後期型の計画村落」と呼ぶ。
- 4 実長が、集落間の社会的な距離を示さないことは百も承知のうえで、敢えて距離による分析を試みたのは、水利の徭役賦課権や、耕地開発・新生集落の興起に伴う労働力の提供が、隣接する集落間のネットワークから成立するためと考えたからである。
- 5 新屋敷東遺跡の分析による第Ⅰ期は、さらに細かく分類が可能だが、資料的に少ないためここでは敢えて大まかな分類にとどめた。古墳時代後期的な土器組成の出現段階に当っては、隣接する集落遺跡の上敷免遺跡で、良好な資料が見られるためこちらの分析に譲りたい。現在、整理事業中。
- 6 新屋敷東遺跡は、第Ⅳ期に衰退的傾向というよりも、竪穴式住居跡の長軸方向の統一・等間隔的占地など計画性に富み、既存の集落の「再編成」とすることが妥当である。
- 7 この傾向は、千葉県日秀西遺跡で顕著に確認されている。日秀西遺跡では、鬼高峰期の集落を移管し、相馬郡衙の正倉を編成している。
- 8 山崎武氏ご教示。（山崎 1987）。
- 9 第607図の土師器は、以下の遺跡から出土している。1埼玉5号墳、2・3埼玉瓦塚古墳、4・5埼玉鉄砲山古墳、6・7鴻巣市出塚1号墳9、8～10行田市小針遺跡、11・12鴻巣市笠原古墳群、
- 10 （財）埼玉埋蔵文化財調査事業団1989年発掘調査。1990年度整理。
- 11 田中琢氏の言う「木の葉」手法に共通する。また橋本澄朗氏による木の葉底の研究は、土器生産の季節性や生産集団の問題等、大いに示唆に富むものである。
- 12 田中 1991b で下総型とした一群である。以後、代表的な遺跡である大谷口遺跡の名前を使い、執筆していくこととする。
- 13 竪櫛の資料は、全国各地からとくに古墳を中心に確認されている。しかし古墳時代の横櫛の例はきわめて少ない。ムネの部分が、半円形となる新屋敷東遺跡の石製模造品のタイプは、木更津市金鈴塚古墳から出土している木製品があるだけである。また飛鳥川原寺下層から出土した横櫛は、奈良時代のそれへ続くムネの水平なタイプである。湯殿神社祭祀跡の調査からは、横櫛は、8世紀の土器が混入していたことから不明瞭であった。しかし新屋敷東遺跡の資料を含め考察する限りでは、ムネが半円形のタイプの横櫛は、少なくとも7世紀前葉まで遡る可能性が見い出せた。

## 参考引用文献

- 赤熊浩一 1986 「暗文土器の分析—8世紀を中心として—」『古井戸・将監塚』(財)埼玉県埋文事業団
- 浅香年木 1971 『日本古代手工業史の研究』叢書歴史学研究 法政大学出版局
- 甘粕 健 1970 「武藏国造の反乱」『古代の日本』7—関東一角川書店
- 飯塚卓二 1986 「埼玉古墳群の出現と毛野地域政権」『研究紀要』3(財)群馬県埋文事業団
- 飯塚武司 1984 「北武藏における埴輪生産の展開」『法政考古学』第9集 法政考古学会
- 石井清司・伊賀高弘 1991 「京都府木津町上人ヶ平遺跡の埴輪窯」『考古学ジャーナル』第331号
- 石岡憲雄・浅野晴樹 1981 『六反田遺跡』埼玉県歴史資料館
- 石田広美 1983 「下総における8世紀代の搬入土器」『房総における奈良・平安時代の土器』
- 石戸啓夫 1984 「大源太遺跡出土の畿内系土師器について」『大源太遺跡の発掘調査』青山学院大学
- 石部正志・堀田啓一 1965 「古墳後期の手工業製品の流通について」『ヒストリア』42号
- 石母田正 1956 「古代社会と物質文化—『部』の組織について—」『古代末期政治史序説』下巻
- 石母田正 1971 『日本の古代国家』岩波書店
- 磯崎 一 1980 「土師器生産に関する二、三の問題」『頸薺神社前遺跡・一本松古墳』埼玉県遺跡調査会
- 井上唯雄 1982 「歌舞伎遺跡における土器の編年」『歌舞伎遺跡』(財)群馬県埋文事業団
- 井上 肇 1980 「7世紀の壺形土器について」『紀要』第6号 埼玉県立博物館
- 今井賢一・金子郁容 1988 『ネットワーク組織論』岩波書店
- 上野純司 1985 「鬼高式の細分をめぐって」『論集日本原始』
- 上野純司 1980 『千葉県安孫子市日秀西遺跡発掘調査報告書』(財)千葉県文化財センター
- 大江正行 1988 『後田遺跡II』(財)群馬県埋文事業団
- 大木紳一郎 1985 「出土土器について」『小角田前遺跡』(財)群馬県埋文事業団
- 大場磐雄・小沢国平 1963 「新発見の祭祀遺物」『史跡と美術』第338号
- 大町 健 1986 『日本古代国家と在地首長制』校倉書房
- 小笠原好彦 1989 「民衆のムラ」『古墳時代の王と民衆』古代史復元 6
- 小川貴司・寺田良喜 1985 「等々力渓谷2号横穴にみる交流について」『古代』第78・79号
- 小川良祐 1986 「XII 結語」『樋の上遺跡』(財)埼玉県埋文事業団
- 鹿沼栄輔 1990 『長根羽田倉遺跡』(財)群馬県埋文調査事業団
- 金子真土 1982 「北武藏の須恵器—7・8世紀の様相について—」『研究紀要』第4号 埼玉県歴史資料館
- 神谷佳明 1987 「暗文土器」『下東西遺跡』(財)群馬県埋文事業団
- 亀井正道 1988 「海と川の祭り」『古代を考える—沖ノ島と古代祭祀—』吉川弘文館
- 川口 潤 1989 『本郷前東』(財)埼玉県埋文事業団
- 菊地康明編 1991 『律令制祭祀論考』塙書房
- 櫛木謙周 1989 「律令期における手工業発展の特質」『北陸の古代手工業生産』
- 久保哲三 1986 「古墳時代における毛野・総」『岩波講座 日本考古学』5—文化と地域性—岩波書店
- 栗原文蔵・駒宮史朗 1990 「行田市陣場遺跡の調査」『調査研究報告』第3号 埼玉県立さきたま資料館
- 群馬県考古学談話会地 1985 「埴輪の変遷」第6回三県シンポジウム

- 鴻巣市 1989『鴻巣市史』資料編1 考古
- 小林敏夫 1977「境町下淵名における遺跡の調査」『まえあし』22号 東国古文化研究所
- 古墳時代土器研究会 1984『古墳時代土器の研究』
- 小森哲也 1986『鳥森遺跡』栃木県文化振興事業団
- 埼玉県教育委員会 1980『埼玉稻荷山古墳』
- 埼玉県教育委員会 1985『鉄砲山古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書第2集
- 埼玉県教育委員会 1985『愛宕山古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書第3集
- 埼玉県教育委員会 1986『瓦塚古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書第4集
- 埼玉県教育委員会 1987『鉄砲山古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書第5集
- 埼玉県教育委員会 1988『丸墓山古墳・埼玉1~7号墳・將軍山古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書第6集
- 埼玉県教育委員会 1989『奥の山古墳・中の山古墳・瓦塚古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書第7集
- 斎藤国夫 1984「埼玉古墳群をめぐる諸問題」『原始古代社会研究』6 原始古代社会研究会
- 斎藤国夫 1990「まとめ」『小針遺跡』—第3次調査報告書一行田市遺跡調査会
- 酒井清治 1986「北武藏における7・8世紀の須恵器の系譜について」『研究紀要』埼玉県歴史資料館
- 酒井清治 1989「古墳時代の須恵器生産の開始と展開」『研究紀要』第11号 埼玉県歴史資料館
- 坂口 一 1986「古墳時代後期の土器編年」『群馬文化』208号 群馬地域文化研究協議会
- 坂口 一 1990「五世紀代における集落の拡大現象」『古代文化』第42巻第2号 (財)古代学協会
- 坂本美夫 1981「甲斐型の土器について」『シンポジウム盤状坏』
- 佐久間豊 1983「斜格子状暗文坏を有する土師器坏について」『史館』第15号
- 桜岡正信 1989「群馬県内出土の暗文土器について」『群馬県史研究』第30号
- 澤出晃越 1985『上敷免遺跡(第2次)・上敷免北遺跡』深谷市教育委員会
- 澤出晃越 1991a『深谷市内遺跡Ⅲ』深谷市教育委員会
- 澤出晃越・古池普禄 1991b『明戸南部遺跡群Ⅰ』深谷市教育委員会
- 塩野 博 1978『馬室埴輪窯跡群』埼玉県教育委員会
- 塩野 博・山崎武 1991「生出塚と馬室埴輪製作跡」『考古学ジャーナル』第311号
- 白石真理 1991「馬渡埴輪製作遺跡・小幡北山埴輪製作遺跡」『考古学ジャーナル』第311号
- 堀山林継 1991「律令期直前の祭祀」『律令制祭祀論考』塙書房
- 堀山林継 1981「石製模造品」『神道考古学講座』第三巻 雄山閣
- 鈴木徳雄 1984「いわゆる北武藏系土師器坏の動態」『土曜考古』第9号
- 高梨 修 1986「古代集落の堅穴住居址に大量廃棄された土器群が意味するもの」『法政史論』第14号 法政大学大学院日本史学会
- 高橋一夫 1979「計画村落について」『東国古代集落の検討』古代を考える会
- 田口一郎 1988「XII 調査成果と提訴された問題」『海行A・B遺跡』箕郷町教育委員会
- 田中広明 1989a「上毛野・北武藏の古墳時代後期の土器生産」『東国土器研究』第2号
- 田中広明 1989b「緑泥片岩を運んだ道」『土曜考古』第14号 土曜考古学研究会
- 田中広明 1991a「古墳時代後期の土師器生産と集落への供給」『埼玉考古学論集』

- 田中広明 1991 b 「東国 の在地産暗文土器」『埼玉考古』第28号
- 田中広明 1992 「武藏地域の鬼高式土器」『考古学ジャーナル』第342号
- 田中 琢 1967 「古代・中世窯業生産の地域的特質—(4)畿内—」『日本の考古学』VI河出書房新社
- 田辺昭三 1966 『陶邑古窯址群 I』 平安学園考古クラブ
- 辻本和美 1991 「6世紀後半の土器粗製からみた石本遺跡」『京都府埋蔵文化財論集』第2集
- 堀 隆 1987 「畿内系暗文を有する土師器坏について」『佐久考古通信』第41号
- 出原恵三 1990 「祭祀発展の諸段階—古墳時代における水辺の祭祀—」『考古学研究』第36巻第4号
- 利根川章彦 1982 「古墳時代集落構成の一考察」『土曜考古』第5号
- 外山政子 1991 「三ッ寺II遺跡のカマドと煮炊」『三ッ寺II遺跡』(財)群馬県埋文事業団
- 外山政子 1990 「羽田倉遺跡の煮沸具の観察から」『長根羽田倉遺跡』(財)群馬県埋文事業団
- 直木孝次郎 1965 「古代国家と村落」『ヒストリア』第42号
- 中島 宏 1981 『清水谷・安光寺・北坂』(財)埼玉埋文事業団
- 中島洋一 1991 「北大竹遺跡(若小玉古墳群)の調査」『第24回 遺跡発掘調査報告会—発表要旨—』埼玉考古学会・埼玉会館、(財)埼玉県埋文事業団・埼玉県教育委員会
- 中村倉司 1979 「児玉郡における鬼高式土器の編年について」『宇佐久保遺跡』埼玉県遺跡調査会
- 中村倉司 1984 「器種組成の変遷と時期区分」『土曜考古』第9号 土曜考古学研究会
- 中村倉司 1987 『下辻遺跡』(財)埼玉県埋文事業団
- 中村倉司 1989 『白山遺跡』埼玉県教育委員会
- 並木高挨 1977 『生産管理』丸善株式会社
- 奈良国立文化財研究所 1978 『飛鳥・藤原宮発掘調査報告II』
- 西山 元 1963 「善光寺平の土師器」『大学紀要』第8集 和洋女子大学
- 西 弘海 1982 「土器様式の成立とその背景」『考古学論考』
- 西山克己 1884 「東国出土の暗文を有する土器(上)・(下)」『史館』第17・18号史館同人
- 日本村落史講座編集委員会 1991 『日本村落史講座』4 政治 I—原始・古代・中世—雄山閣
- 能登健・石坂茂・徳江秀夫・小島敦子 1983 「赤城山南麓における遺跡群研究」『信濃』第35巻4号
- 能登健・内田憲治 1985 「峰岸遺跡—里棲み集落の調査—」新里村教育委員会
- 能登 健 1986 「里棲み集落の研究」『内陸の生活と文化』
- 橋本博文 1981 「埴輪研究の動静を追って」『歴史公論』第63号
- 橋本澄朗 1987 『稻荷原・大野原』
- 長谷川厚 1987・1988 「古墳時代後期土器の研究(1)・(2)」『神奈川考古』第23号・第24号
- 長谷川厚 1989 「神奈川・千葉県地域の赤彩土器・黒色処理土器について」『東国土器研究』第2号
- 長谷川厚 1991 「土師器の編年 7 関東」『古墳時代の研究』6 土師器と須恵器 雄山閣
- 原 明芳 1990 「信濃における平安時代の黒色土器」『東国土器研究』第3号 東国土器研究会
- 原田信男 1987 「食事の体系と共食・饗宴」『日本の社会史』第8巻 岩波書店
- 原秀三郎 1973 「日本古代国家論の理論的前提」『歴史学研究』第400号
- 梁木 誠 1987 『稻荷塚・大野原』栃木県教育委員会

- 林部 均 1986 「東日本出土の飛鳥・奈良時代の畿内産土師器」『考古学雑誌』第72巻1号
- 比田井克仁 1985 「7世紀における多摩地方の土器様相」『研究論集』Ⅲ (財)東京都埋文センター
- 福田健司 1978 「南武藏における奈良時代の土器編年とその史的背景」『考古学雑誌』第64巻3号
- 房総古文化研究会 1987 「房総における古墳時代後期土師器の年代と地域性」総括シンポジウム
- 堀口万吉 1981 「関東平野中央部における考古遺跡の埋没と地殻変動」『地質学論集』第20号
- 堀口万吉・角田史雄・町田明夫・昼間明 1985 「埼玉県深谷バイパス遺跡で発見された古代の“噴砂”について」『埼玉大学教養部紀要(自然科学編)』第21巻
- 堀口万吉 1986 「埼玉県北部で見られる古代の噴砂について」『歴史地震』第2号 東京大学地震研究所
- 増田逸朗 1970 「大里郡妻沼町発見の土師器」『埼玉考古』8号 埼玉考古学会
- 増田逸朗 1987 「埼玉政権と埴輪」『埼玉の考古学』新人物往来社
- 増田一祐 1987 『社具路遺跡』本庄市教育委員会
- 水口由紀子 1989 a 「いわゆる“比企型坏”的再検討」『東京考古』7 東京考古談話会
- 水口由紀子 1989 b 「古墳時代後期における土師器の一分析」『東国土器研究』2
- 宮田 毅 1991 「太田市駒形神社埴輪窯跡埴輪集積場」『考古学ジャーナル』第331号
- 宮瀧交二 1989 「古代村落の飲食器」『立教日本史論集』第4号 立教大学日本史研究会
- 茂木由行 1984 「群馬県における鬼高式土器の編年」『群馬考古通信』第9号 群馬考古学談話会
- 茂木由行 1987 「群馬県における鬼高式土器の編年Ⅱ」『群馬文化』211号 群馬県地域文化研究協議会
- 森田克行 1991 「新池埴輪製作遺跡」『考古学ジャーナル』第331号
- 山崎 武 1981 『生出塚遺跡』鴻巣市遺跡調査会
- 山崎 武 1987 『鴻巣市遺跡群Ⅱ一生出塚遺跡A地点』鴻巣市教育委員会
- 大和 修 1983 『若宮台』(財)埼玉県埋文事業団
- 山中敏史 1984 「国衙機構の構造と変遷」『講座日本歴史』2 岩波書店
- 山本 靖 1991 「利根川南岸地域の前方後円墳の展開」『専修考古学』久保哲三先生追悼号
- 横山浩一 1966 「土器生産」『日本の考古学』V 古墳時代下 河出書房新社
- 義江彰夫 1972 「律令制下の村落祭祀と公出拳制」『歴史学研究』380号
- 若松良一 1990 「造り出し出土の供献土器について」『調査研究報告』第3号 さきたま資料館
- 若松良一・山川守男・金子彰男 1987 『諏訪山33号墳の研究』
- 和島誠一・甘粕健 1958 「武藏の争乱と屯倉の設置」『横浜市史』第1巻